

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年三月廿日印刷納本 昭和十三年四月一日發行

第四卷 第四號

淨土



四月號

絶好の

布教用書

法語例

(一七) わが浄土をたつる心は凡夫の報土にむ(生)まるゝことをしめさんがためなり。

(二〇九) 酒飲むは罪にて候か。答。まことには飲むべくもなければ。この世のならひ。

(二一五) 子産みて神佛へまいる事百日はばかりと申候はまことにて候か。

答それも佛法にはいま(忌)す。

(二三四) 出家は若きと老いたるといづれが功德にて候。老いては功德ばかりえ候。若きはなをめでたく候。

法然

上人

法

語

抄

定價 三十六錢
送料共

クロース装
菊半截一三〇頁

私たち
の今なやん
でゐる問題を法
然上人は己に八百年
の昔に悩んでおられた。
そして迷信的、偶像的宗教の
是正改革を叫んだのが祖師であ
つた。
西にルーテル東に法然と稱せらるゝ所以
である。法然上人の句々言々悉く時代への關
心が波うつてゐる。

本書整備内容 (藤井實應編)

○道を求む ○新しき救ひの道 ○本尊 ○安心 ○念佛
○生活 ○社會 ○和歌 ○法然上人の略傳

發行所

法然上人讃仰會

改增
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 價定 頁〇八版六四 付名假りふ總 著康辨村中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷夢から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を開く。『浄土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 法然上人に關する文獻は古來少しとしたかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その翳々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

◆ 會仰鑽人上然法 所行發 ◆



◇ 浄土 第四卷 第四號 四月號 目次 ◇

表紙……………井上正春
扉繪……………樹下雄

新日本建設の聖戰に傷ける

將士の御奮闘を謝して……………管土宗長 郁芳隨圓……………(二)

藍毗尼苑を訪ねて……………野生司香雪……………(四)

釋尊降誕と東洋の使命……………ボース・ラス・ビーハリ……………(三)

一求道者としての釋尊……………中村辨康……………(二四)

入明を企てた袋中上人……………江藤澂英……………(三)

新興ドイツを見て……………坂戸智海……………(三八)

隨人は佛になれるか……………佐藤賢順……………(二〇)

筆お茶の行商人……………吉水辨道……………(四六)

從軍僧だより……………白崎嚴成……………(四四)

信仰相談……………中村辨康……………(三)



法然上人の御誕生

宗教座談 鐘詰の宗教

信仰の巨人伊藤博文公

家庭と妙好人瓜生岩子を語る

婦人

ス・フと育兒
信仰への道

歌俳

壇壇

中野尅子 (三)

薄、淨光 (三六)

佐山學順 (五〇)

山瀬由起子 (四八)

橋本樂榮 (四九)

與謝野晶子選 (二)

太田耳動子選 (三)

讀物特輯

まんがトンダ昆虫採集

コント 掏摸に逢つた話 (大羽)

童話 文覺上人と土龍 (水野)

小説 靜御前 (鈴木)

鑽仰運動ニュース
編輯部だより

大羽比羅夫 (三)

木谷新八 (四)

奥、榮一 (五六)

今野賢三 (二四)

(五)

◇淨

土

第四卷

四月號

目次

◇

油繪『法然上人の聖像』出づ!!

藝術の至境は?……瞻仰の瞬間に理想の生命を味識するにあり!
宗教の極致は?……永劫の憧憬を現實の胸寸に感得するにあり!

十年の苦心、鏤刻の結晶、髣髴として上人に拜謁するの思ひあり。

小橋 麟 瑞 監修

伊達 幸太郎 揮毫



本聖像は監修者十數年來の宿願を實現せるものにして、揮毫者伊達畫伯は在米十八年主として肖像を研鑽しセントルイス美術學校教授たり、その神技は彼地の畫壇を驚嘆せしめ歸朝して東京にあるや時の帝國美術院長子爵黒田清輝畫伯は最高の推辭を惜まざりし本邦洋畫界の先覺者にして人格高潔の士、寔に聖像の筆者たるの資格充分ならん。監修者と揮毫者との協力苦辛三ヶ年の日子を費して昭和十年二月廿五日髣髴として生けるが如き上人の慈容は完成せられ今や世界的名畫なるべしとの推稱の辭を悉にしつゝ、全念佛門流を驚喜の渦中に投じた調期的傑作である。

竪一尺二寸、横一尺五分、原色十度刷精巧高級品
領布價一葉金五圓也(額用)送料當方負擔

便宜取次 法然上人鑽仰會

聖像一葉各に『法然上人十德頌』(小橋麟瑞著四六版百頁)及『聖像謹解』各一部を謹呈す。『十德頌』のみ御希望の方は定價廿錢、送料二錢にて御願ちします。

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

浄土

四月號

むまれてはまづ思ひてん

ふるさとに

契りし友の

ふかきまことを

法然上人御詠





新日本建設の聖戦に傷ける

將士の御奮闘を謝して

淨土宗管長 知恩院門跡 郁芳隨圓

我が國は歴史始まつて以來、曾て無かつた程の、重大な時局に當面致して居ります。世界の歴史は一大轉廻の時期に際會したのであります。受け難き生をこの世に受け、この重大な時に遭遇致しましたことは、誠に勞苦の多いことでありますが、新日本建設の重責を双肩に擔はされたのでありますから、却つて光榮と考へ喜びと致すべきであります。世界の歴史は避け難き歩みを續けて、今日に至つたのであります。然るに今回の事變は東洋平和確立の聖業でありまして、この意義深き時代に生れ合はすことの出来ましたのは、人として生を受けたるものゝ、光榮とするところと申さねばなりません。今日我々が刻苦致さねば、子々孫々は今に幾倍する勞苦を致すか測り知れないのであります。

事變一度起るや、忠勇なる我が將士は、親を忘れ子を捨て家郷を棄て、勇躍第一戦に奮戦なされました。或る時は酷熱鐵をも溶かす朔北の野に、或る時は寒風肌を劈



まゐる。

く江南の地に、轉戦幾十日、全く不惜身命の力戦を重ねられました。これは眞如より流れ來れる如來の大精神を如實に體現せられたのであります。正義の爲に我が身を布施するといふ無我の體現、捨身奉公の行こそは、佛教精神そのものでり、眞の菩薩行であります。生死の境を離脱して大安心に住し、幾多の武勳を立てられましたのは、如來の大悲を仰信する日本精神の發露であります。さればこそ、正義の法輪の轉ずるところ何物もこれに抗する能はず、僅か半歳ならずして世界恒久平和の曙光は東亞の全土に輝き初めました。これ固より上大君の御威稜の致すところなるは申すも畏多いことではありますが、また偏に忠勇なる將士の鐵血肉彈の賜物に外なりませぬ。今日の我が日本は既に昨日の日本ではありませぬ。今ぞ新日本の日輪は東亞の空を茜色に染め、世界の暗を照破せんとしてゐるのではありませぬか。銃後にある者は、身を鴻毛の輕きに比して力戦せられし將士に對し、只々心からなる謝意を表するのであります。誠に世界平和の礎は、これら幾多の皇軍將士によつて築かれたのであります。諸士は、壯圖半ばにして、名譽の戦傷を受けられ、或は無念にも病を得られなどして暫く第一線を退かれました。その御胸中さぞかしとお察し致しますのであります。然し寔に諸士の赫々たる武勳は、永く昭和の國史を飾り、明朗日本の曙光と共に、愈その輝きを加へることは、申すまでもないことであります。如來の大道を體解すること益々深く、切角御加餐あつて、再び起つて、この鴻業を全うせられる日の一日も近からんことを、衷心より希念致します。

・ 野 生 司 香 雪 氏 ・
・ スーボ・スラ・ハービ・リ氏 ・
・ 中 村 辨 康 師 ・

花 祭 り 特 輯

下圖はニルビン苑摩耶夫人祠の本尊——佛降誕の石彫磨滅して僅かにその影を留む
(野生司香雪靈伯撮影)



藍毘尼苑を訪ねて

野生司香雪
(文並びに撮影)

— 藍毘尼苑を訪ねて —

(5)

大聖釋尊の降誕は衆聖賢記説によると、本年が二千五百四年に當るといふのである。而して四月八日といふ日が北方佛教には、最も多く用ひられて居るけれど、印度では阿沙荼月の満月の日となつて居る、その阿沙荼月といふのは大體に於て五月に當る、であるから五月の満月を以て、その聖日として南方佛教徒はお祭を営む。尤も南方佛教では降誕も成道も涅槃も、三つとも皆なこの五月の十五日といふことであり、又西藏ではこれが三つとも四月の十五日といふのである、斯ういふ風に同じ佛教でも南傳と北傳では著しく異つて居る。そののみならず北傳では無憂樹の下に於て、降誕遊ばされとあるが、南傳では沙羅樹の下とある。北傳ではこの沙羅樹は涅槃の時に限つてこの樹となつて居る。それから月も二月説四月説五月説と、いろ／＼あるが、何れも春風臨瀟として百花妍を競ふ、地上の樂園に、太子がお生れになつた様に書かれて居るが、四月にしても五月にしても、印度に於ては春風臨瀟どころが、一年中で最も灼熱の候である。春風臨瀟日といふのならば、二月説が最もその氣分に近いのである。こんな風にそのよる所が

いろ／＼まち／＼になつて居るが、何れにしても二千五百年前の傳記を神祕的に美化して考へて居るのであるが、その聖跡に就て觀ると轉た今昔の感に堪へないものが多々ある。今その聖跡を語るならば

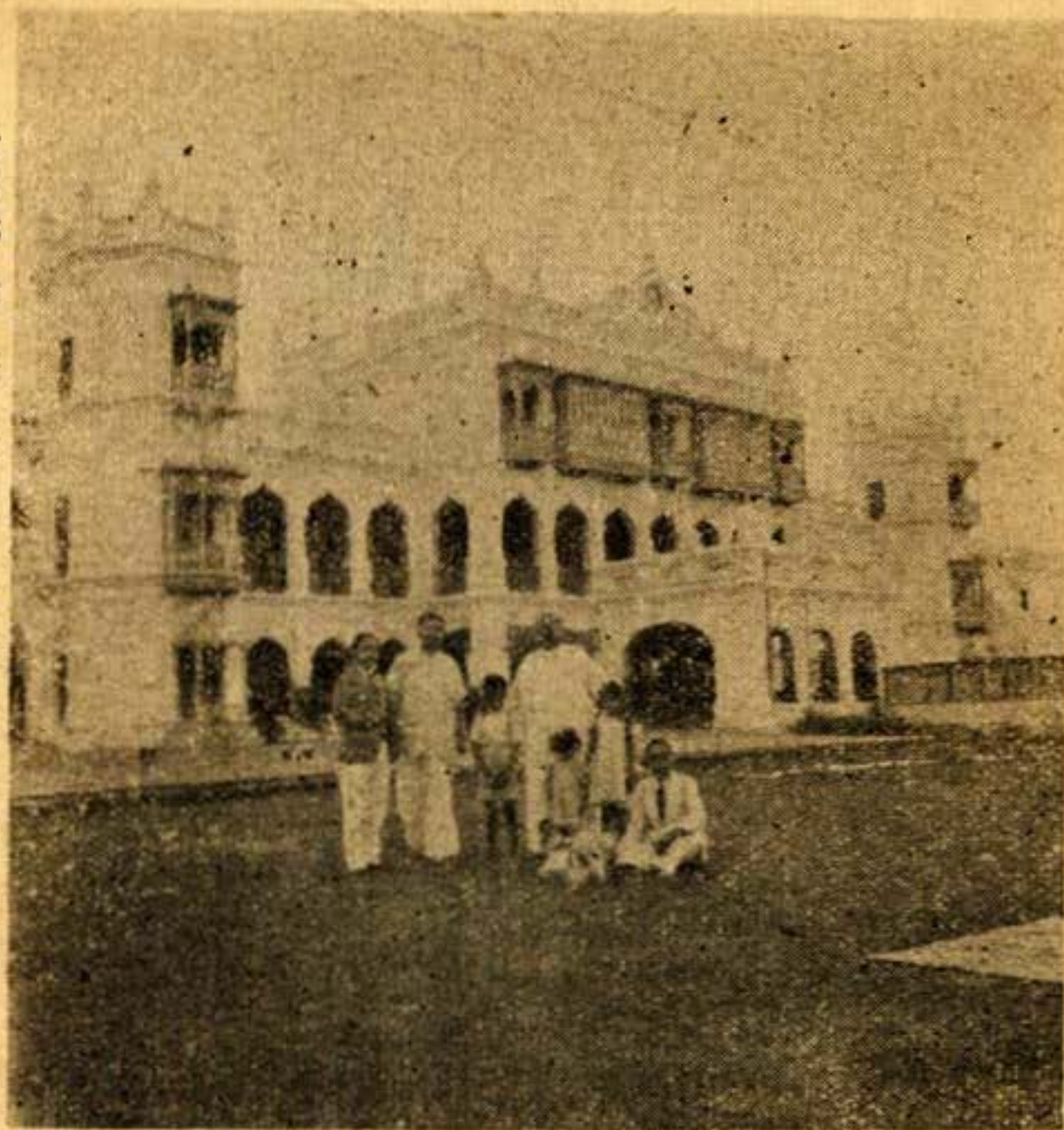
降誕地、藍毘尼は現名ルンペンディ、というて居る。その昔迦毘羅國の遊園で北は白皚々たる大雪山を背負ひ、南は渺茫として際限なき平野である。往時は印度領なりしも今はネパール領の國境內を僅かに入つた寒村僻邑である。こゝに行くにはいろ／＼途はあるが、自分は北印の一小國シヨハラットの大王に添書を貰つて居つた關係上この地に向つた。時は恰も四月の末の頃で車内でも百十七八度といふ酷暑、加ふる黄塵渦く熱風が襲うて来る。宛ら陶甕の中に吸ひ込まれる如く壯絶といふか凄慘といふかイヤハヤ、トテモ恐ろしい地上の異變である。こんな怒りに荒む天地を多くの畫家や小説家に見せてやりたいと思つた。さうしたのを、さきの世界も夜の帳りに包まれて、暗黒と時とが精算して旅の疲れにトロリと寐つた。明け方近くシヨハラットガンヂー驛に着いた。昨日の熱風は忘れた如く、ほの／＼と明け

行く東の空は赤とない澄みきつた爽さである。朝餉を軽くすませて王城へと向つた。見上げる様な大きい城門は恰もお伽話のお城その儘だ、その錆び付いた鐵の扉は階級といふものゝ厳めしさを無言に語つてゐる。

今し、門衛は重い門扉を開く處であつた。私は紹介狀に名刺を添へて王への取りつぎを頼んだ。暫く待てと會繼して、彼は奥に消えた。待てど暮せど出て來ない。これは蓋し王に謁見することは不可能と半ば諦めて居つた處、ヤット赤い正服に鑒刀を腹のところに構へた親兵長とでもいふのが現はれ、どーぞコチラに來て呉れといふ。これは、しめたと大きく息を吹き返して乗り込んだ。案内さるゝ儘に物珍らしいお城の奥深く客殿に通つた。豹の皮を敷いた長椅子に腰を下して臍下丹田に咳拂ひを一つした。室内の裝飾が虎、豹、鹿といふ首を鑲製にしてかけてある。ナント動物園の檻の中に迷ひ込んだ異風景だ。これが王の趣味か、サテは猛獸狩に興味を有つ殺戮な王かなど、想像を逞しうしながら待つて居た。

王様と對面

ドアが靜かに開いた。



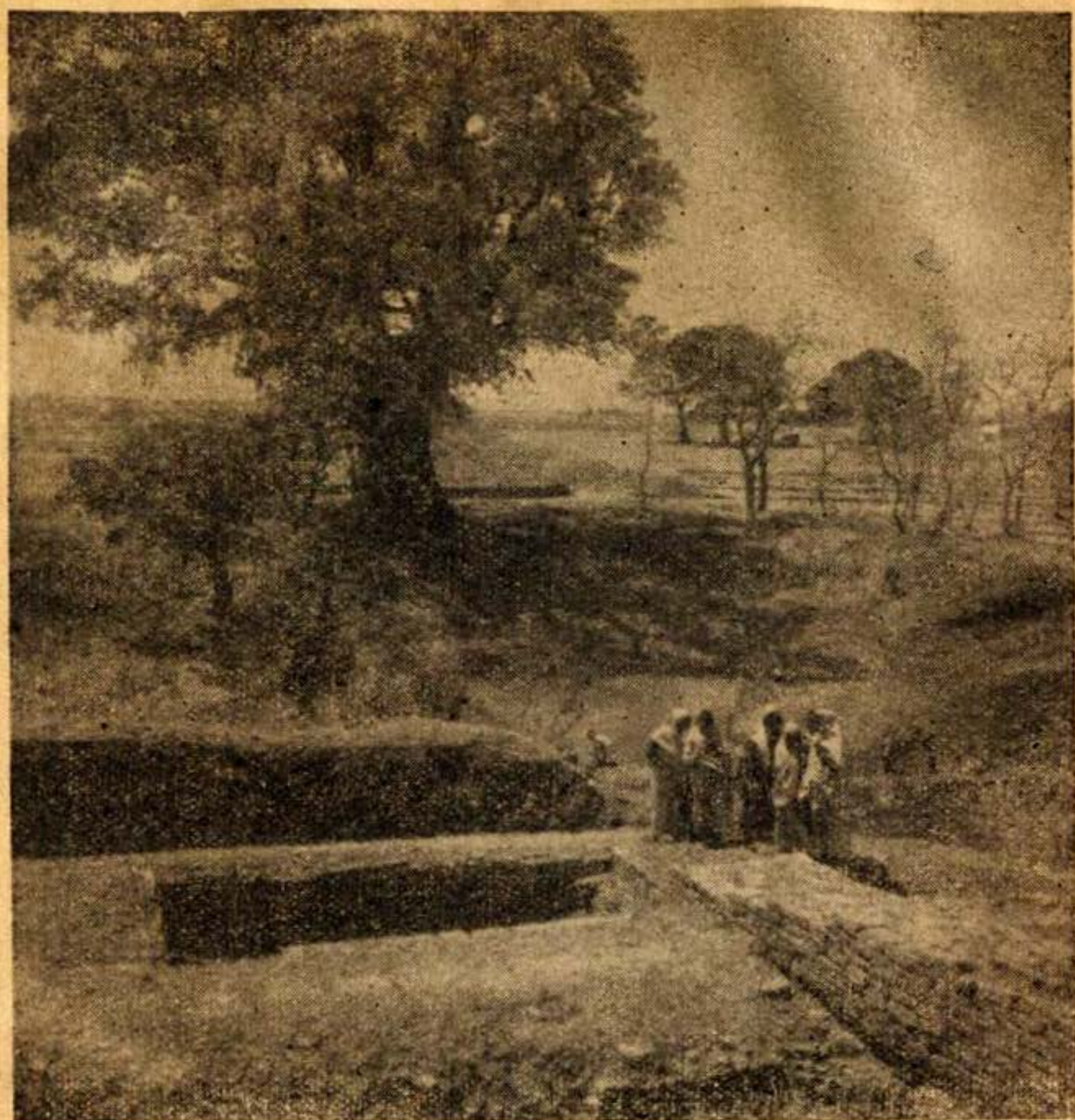
(と王て於に庭前の宮王のジンガ・トツラハヨシは眞寫)
(。者筆が端左、王が人の滿肥の央中。のもたつ撮に共)

王は純白の服裝に巨大な體軀を包んで現はれた。今時珍らしく、カイゼル型の髭を拵り上げて居る。成程アノ待たせた時間は髭の手入れでありしかと想ひながら、先づ初顔面の挨拶をして、來意を告げた。彼は溫顔に笑みをたゝへて、

ヨロシイ、何日でも泊つて緩くりその聖跡を巡拜なさつしやれ、してアナタは食事に何を食はれるかなど、至れり盡せ

る深慮であつた。

王は大象三十頭と自動車十臺を有つて居る。夕刻、王乗用の車を出して附近をドライブする様にと勧められた。勧めらるゝ儘に近郊をド



上掲寫眞はルンビニ苑——摩耶夫人沐浴せし蓮池の名残、池畔に觀る大木は菩提樹なり

ライブする事にした。この土地では、王以外に自動車をもつものもなく、又王乗用の車が通るかゝると、王の外出と見て取つてか耕作の百姓達が鋤を捨て、田の畦に出で、跪いて合掌する。王ならざる僕は少々てれ臭い、然し何とか會釋しない譯には行かず、仕方なく舉手の禮で過ぎ去つた。人間は淺間しいものだ、斯うやられると一瞬丈けでも王侯となつて君臨したかの様に小鼻を脹らます。廻て車は、とある大きな建物の前に止つた。案内者の説明によると、此國の納稅所である。中から慌しく總員が出て來た、これは王の車が止つたからであらう。諸員の中から白鬚の老人が車に近づき、車中にぬつと手を延べて、私の體に觸れ慇懃に禮をした。この老人が何でも大藏大臣格の人ださうだ。ドライブを終へて館に歸つた。

翌朝は早起きをして、藍尼園に向ふことにした。ここから普通は牛車で行くのであるが、牛車では片道一日、往復三日かゝる、この炎天

に到底堪へ難いといふので、王は自動車を用意して呉れた。而し途中難路のため人足を同乗させて處々途普請をしながら進むといふ、頗る呑氣な旅であるが、牛車のことを想へば雲泥の差である。

朝ぼらけ、いかに熱帯でも多少は冷氣と静けさに包まれて、それが又聖地に向ふ我が身には洗心の心地さへする。打ちつゞく竹林を透して薄紫の東雲を破つて、大きな赤い／＼陽がせり上つて来るのを見た。その壯嚴な雄大な而して音なき音楽は、あらゆるものを征服する。異郷で味ふ特種の自然はそれ自體が開闢的創作の世界で、魂までも染められて仕舞ふのである。朝餉の支度が水汲んで髪を頭に絞せて歩む婦人、山羊の乳を搾る乙女、朝の薄陽に綾なす姿態は、宛ら一幅の活畫だ。畫家である自分は唯々嬉しくてならない。そればかりか次ぎ／＼と展開して

来る途の邊に野生の孔雀が何羽となく奄沒羅の樹陰に行きかうて居るなど阿彌陀經の極樂の描寫はこんな光彩を更に美化潤色したものであらう。こんな麗らかな景色から瞳をあちらに移すと、象の背に丘ゆく

人の寛容さは、時にあくせくする文化人を嘲る様だ。昨日は車窓に迫る萬丈の黃塵と熱風に引きかへ、今日は何んといふ恵まれた日だらうと、湧き出づる喜びと、貪り觀るに眼が二つしかないことを悲んだ。



(形婆塔卒を砂土のそてし掘發を跡古の苑ニピンル)
。りあれ恐す起を題問世後、のもるけ置り盛に

聖跡に巡禮する身でありながら、詩趣豊かな異國情緒を滿喫して、途の悪いのも氣にならず過ぎ行く程に、大きな榕樹の下に屯ろして居た裸の泥から生えた様な子供等が、私を見付けて物珍らし相にチーナ／＼(支那)と連呼して途を阻んだ。今まで折角極樂の繪卷を繰り延べて居たのに、今度は急轉して漫畫の世界、鬼や角するうち、はや聖跡藍毗尼に着いた。

ルンビニ苑の土を踏む

ここが二千五百年の昔大聖釋迦牟尼世尊が降誕し玉ふた寶土である

と聞き、聊か幻滅の悲哀を感じた。佛典に記する降誕は八功德水を湛へた五彩の蓮池を繞る極樂淨土である。然るに今この肉眼に映る聖地は瓦石と雜草に蓮池として下界の穢土である、何んとも情ない事ではないか。而し又

人間釋尊として現前したものと考へれば、この泥土も曾ては佛足に觸れ得た、いみじき限りである。勿體なや佛もふみけんこの御土と無季の一阿育王のたてたる石柱勅額の拓本本文参照

何を口ずさんだ。

今は唯見る平野、林樹まばらにありて田園に耕作を見る情景は、蓋し昔ながらのものであらうが、今、昔を物語る名残りとして小丘の上に小さき祠堂と、その背後に阿育王の石柱、それと相隣して小さな池あるのみである。而し佛教興隆の當時は、ここを無二の聖跡として道俗相集り、勤行に隨喜せし淨域であつたやう、といふのも此一帶古建築の基趾累々としてあり、政府の事業として目下切りと發掘に従事して居るから、遂からず二千年の昔を偲ぶ幾多の資料が發見することと思ふ。

中程にある小さな池は惟ふに、その昔、黃色黃光、赤色赤光と華水相映じ、水禽又相戲れて居た清澄の寶池であつたやう、聖母摩耶はここに沐浴して、蓮歩楚々新草を踏んで、無憂華燦する薰風に今し憩はんとせられし時忽然として右脇より太子降誕せられ、時ならぬ天樂は五天に滿ちて、この地上に限りなき光塵を示し玉うた。不朽の歴史を有つ御池の名残りである、思ふて水鏡すれば有漏凡夫の身が、今日ばかり否なこの瞬間菩薩になつて見える、渚にうつとりして居ると、何やら人の氣配がするので後ろを見ると、村の乙女等（寫眞参照）三々、五々水汲みに來て池畔の菩提樹下に憩ひながらさややく、彼女が明眸朱唇は奢りの春に紅潮して居る。遙々來た巡禮の私の眼に、この婉なる叙景を透して、聖母摩耶のありし日を默想した。

小丘の上にある祠堂は摩耶夫人を祀れるもので、扉を排して石段を

六七段下ると、正面に巾約四尺丈、六尺位の石に太子降誕を高麗に彫り刻んだものが、どうしたことが表面が悉く磨滅して僅かに輪廓のみを残して居る。この御姿も遠い遠い昔石工が一鑿一鏤に作られたもので、爾來無數の善男善女が禮拜した、祈りの結晶が秘められて居るであらう。

堂宇とでもいふ、白髪の婆羅門が一人燦つた部屋隅に吉祥草を敷いて黙然と結跏趺坐して居る。彼は見るからに世俗からのがれて、心神生活の鍛錬を得て人生といふものを透徹して居る様である。白眉の下から底光りのする彼の眸は今にも雲を破つて搏たんとする靈氣が人に迫る。

私は慄る／＼、モーシと問ひかけた。

「……………」

モーシと疊みかけた、

「何か」

「卒爾ながら、アナタは何を考へて居りますか、と聞けば

「それを聞いたら、お前は分るか」

これはとんでもなく驚愕になつたと氣付き、跪き合掌して、祠堂を出ようと石段を上り始めた處、別な番僧が聲をかけて、

これを頂いて行けと額を指した。

再び婆羅門僧の前に戻り、跪くと、傍にある栴檀木を石の上に水をぼたり落して磨りつけ、薄茶色のものを母指につけて、私の額に押し

た。

私は番僧にその代償として銀貨一枚を渡して出でた。

摩耶夫人祠の背後に阿育王の勅文を刻んだ石柱がある。これは佛滅二百年頃全印度を統一した阿育王が、深く佛教に歸依して、佛跡を巡拜してその聖跡に石柱を立て記念したものである。

玄奘の大唐西域記には大石柱の上に馬像を作る、無憂王の建つる處後ちに惡龍霹靂のために中折して地に仆るとあり、今なほ千三百年の昔玄奘の目撃せし姿のまゝである。この石柱は今から四十二年、前フエーレル氏が此地の叢林中に發見し得て、その銘文により佛降誕の聖跡なることを確認したのである。

勅文は下より約五尺位の處に横に五行九十三字の阿輪迦文字で刻したもので、その釋は高楠博士の記載によると

天愛善見王は即位第廿五年親しく此地に來り禮拜す釋族の出家

佛陀は實に茲に降誕せり、王即ち石馬を作り石柱を建つ。

世尊は實に茲に降誕せるに依り、天はルンビニー村を免租地として以て天恩を霑はしむ。

宿願であつたこの靈蹟を、親しく拜し、踵を還さんとせし時、暮れかかつた西の空に啼かぬ鳥が一羽北へ涉つて行く。 寂靜々

筆者野生司畫伯は印度のムーラガンダ寺の大壁畫を多年の辛酸の未完成せられ、昨年歸朝せられた。

短歌

興謝野晶子選

一等 大津 上野 眞翠

仰ぎ見る如月の空ま青にてかなた
に白し比叡の山並

(評) 二月の珊瑚色に暗れた空のもとに白く輝く比叡連峰の雪、作者は湖畔に立つてこの清浄の景色に打たれた。

二等 京都 永田 七郎

わが心かくも愚かに悪しけれどか
しこし攝取不捨のみめぐみ

(評) 自らを反省し懺悔することかくも深き人にして、はじめてみ佛の大いなるめぐみが味ははれるのであらう

三等 仙臺 三浦 順子

病ひ癒え手づからわれが母上にま
ゐるひる餉そ幾とせふりに

(評) 作者は孝心の深い氣だてのやさしい人であるらしい。永い病から放たれて母上の給仕をする喜びが素直に表現されてゐる。

京都 細木 隆

春の空かすめる涯をながむれば幸
ひの國あるここちする

京都 辻 榮光

おほいなる人にくらべておのが身
の憐みも欲もあはれなるかな

朝鮮 羅江八年坊

おん慈悲にまもられ生くる悦びを
持てれば強しなやみあれども

神奈川 眞島 梅作

みいくさの庭に初日を迎へぬと云
ふ交の來て老いし母泣く

徳島 神原 梅

末の世のはかなき相に人慣れて念
佛申さず悲しとぞ思ふ

東京 宮崎 桃

幼なごの小さきその手の冷たさは
わがたなごにのせてあたゝむ

朝鮮 三浦 幸愛

すき間より洩るる光にうかがへば
夜なべされ居る母は小さし

石川 藤田四三九

たまさかの休日なれどみこもれる
妻の物縫ふ部屋の明るき

東京 小泉 妙春

みあかしに春の光の影さして香の
煙はむらさきに浮く

大阪 吉廣 夏生

あだし野のみ佛いますおん寺に春
のはじめの細き雨ふる

小倉 益田 牙谷

ほのぼのとみ堂の屋根に陽炎のも
ゆるを見れば春は來にけり

千葉 高橋美矢子

春雨の二日續きて我が行く丘の
島の麥莖立ちぬ

北海道 花田 順佳

野崎聖海君に寄する
御佛の道を傳へてあめりかに年経

る君がいさをも高し

外國へ法を弘めてみ佛に仕ふる君
よ健かにませ

東京 三野輪江雪

灰青きゆふべの富士はやがて消え
ネオンかがやく街の近づく

朝鮮 推應 芳利

たらちねの母のたよりをなつかし

く讀めば故郷の山川の見ゆ

われゆかん後は頼むと若妻にさと
す勇士のあかき顔かな

京都 島崎幸治郎

大君の邊にこそ死ねと黒髪をきり
て勵ます大和なでしこ

青森 高松 月子

神のその祈願の旗のなびくなりみ
楯となりしつはもののため

京都 奥田 繁保

たづねくる友もなければ唯一人物
思ひつつ機を織るかな

京都 郡司島國也

三五夜の牙えたる野路をなつかし
く歩みゆきけり病いえつつ

大連 内藤 麗海

神垣に朝詣りして祈るかな出向ふ
子等の武運長久

北海道 寺田 嶺山

孫の手をとりて抱けば自らほと
け心となりけるかな

北海道 寺田 嶺山

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「淨土」編輯部敬願係
あて送ること

釋尊しやくそんの降誕かうたんと東洋とうやうの使命しめい

印度志士

ボース・ラス・ビーハリ

印度に於ては古代から世の中を四つの期に分けてゐる。ソチア・ユーガ（眞理の時代）から、第二、第三を経て益々時代が悪くなり、やがて第四のコーリ・ユーガ（惡の時代）となるのである。

眞理の時代に於ては世の中が平和で、生活も楽しい。人間は精神的に向上し、人々は幸福になる。それに反して、第四のコーリ・ユーガ（惡の時代）にはまるで正反対な現象が現はれて来る。即ち紛争、憐み、惡、不徳が世界を支配し、人類は最も不幸な状態に陥し入れられるのである。それで、印度の古代からのななしに、世の中が眞理の時代から第四の惡の時代にまで到達した時に、それが再び生れかへつてまた眞理の時代に入ると云つてゐる。

だが、この眞理の時代に入るためには、矢張りそこに偉大な人物の指導を仰がなければならないことになつてゐる。その時に惡を退治し、善を獎勵するために神の化身（incarnation）が出現せられることになつてゐる。

印度（バラモン）教中に、今までに惡の時代の世の中を善導するために、十回の化身が現はれたと云つてゐる。その最後の化身と云ふのが釋尊である。日本では印度には佛教徒が非常に少ないと云はれてゐるが、今も云ふ通り釋尊は印度の國內に於て十番目、即ち最終の化身であるとされてゐるので、印度教中では神として崇拜されてゐるのである。であるから、印度教と佛教とは別々なものではなく、兩々相俟つて、一つのものを成してゐるのである。

それで釋尊が御誕生になつたと云ふことは、今も述べたやうに、世の中を善導し、再び眞理の時代に甦ると云ふ大目的を持つてゐるものである。従つて、こゝでは佛教なるものが、單に印度に生れたものの、印度のものと云ふよりも寧ろ世界のものとなり、またこれに依つてのみ、世界が救はれるのであると云ふ大理想がある。

勿論世界には色々な宗教が存在してゐるが、佛教が他の宗教と異つ

てゐる著るしい特色は、他の宗教の背景には流血の場面が數多く存在してゐるのに反して、佛教に於いては、流血よりも寧ろ犠牲、慈悲、人道の場面が多い。この點から見れば、佛教は他の宗教に比して優越なる地位を占めてゐるのではないかと思はれる。

また佛教が、單なる寺院のみによつて、僧侶のみによつてこれが生活に應用されるのではなくて、一般の人々までも僧侶と共に、生れるか



ら死ぬまで、これを實生活の上に應用してゐると云ふ特色を持つてゐる。(寫眞は印度ムーラガンダ寺の大壁畫の二部釋尊降誕の圖)

どうしても、今日の世の中の鬭争、紛争、憐み、悲しみ、等の根本の原因は宗教が宗教的に用ひられないと云ふことにあるのではないか。つまり宗教と云ふものは、朝起きてから夜寝るまで、生活と相伴つて行かなければならないのである。それさへ出来れば世の中の迷惑、矛盾が無くなり、幸福が招來されるのである。佛教の根本をなす精神は和合主義である。この和合主義を徹底せしめれば、個人、社會、國家の生活も完全になるのである。

今日の支那事變の根因は色々あると思はれるが、注目すべきことは、支那國民の中に於ける和合主義の缺乏である。兄弟の中の喧嘩は誠に残念なことであるが、これを除くには和合主義の實現の外に何ものもない。誠に佛教の土臺の上に、和合主義を建設して行かねばならない。この目的のために、われわれの言論、思想、行動を一致して進めれば、その時始めて世界に平和が確立され、人類を幸福に導くことが出来るのである。そして、釋尊誕生の大理想がこの地上に開花するのである。

筆者は英國官憲に迫はれて我國に亡命中の印度獨立運動の闘士にして、佛教の信仰厚く、頭山滿翁を始め我國朝野の名士に知友多し。



釋尊しやくそんを語るかた

一求道者ぐだうしやとしての釋尊しやくそん

中村 辨 康

苦行者くぎやうしやからの離脱りだつ

ゴータマ・シツダルタは六年の苦行をウルビーラ村の苦行所で、コンダンニヤの五人組の出家達と一緒に居た。

夫れは全く文字通りの苦行であつた。

一日に一粒の胡麻しか口に入れなかつた。或は一日に一粒の米しか胃袋に入れなかつた。

だから、もうすっかり瘠せおとろへて骨と皮ばかりになつてしまつて居た。

或時は昏睡状態になつてウツラウツラ眠つてばかり居たし、甚だしい時などは、呼吸困難に陥入つて

「ゴータマは死んでしまつた」とさへ思はれたことさへもあつた。

「何と、無意義な苦行よ」

長い苦行の結果として、たゞウスボンヤリした日が、毎日毎日續くばかりなのである。

ゴータマは考へた。

「現在修道者の途として與へられて居るものは二つの行き方しかない。苦行か瞑想かである。然し私はアララ・カラ・マ仙人やウツダカ・ラーマ・ブツダ仙人などのところで長いこと、無想や非想非非想の修練をし、その意味ない事を知つたから、此處へ來て殘された一つの途の苦行を六年も人一倍熱心にやつたのであつた。然し結局何も得るところはないのである。そして幾度か死門にも入らうとして僅かに此の骨と皮だけを持ち續けて來たのだが、此うへ尙ほ續けて行くとすれば唯だ死があるだけではないか。假に命はあるとしても何が私の中に殘るであらう。極度に衰弱した身體から力強い元氣の出る筈はない。畢竟「物心不二」なのだ。身體を苦しめることは精神をも磨り切らせる事でしかない。然かも牛病人のやうな人生を維持することが宗教の修養法だとは何としても考へられない。若しそれが宗教ならばむしろ人間に取つて不必要なものだ。イヤ、不必要ばかりではない。害こそあれ益のないものだ。して見れば正しい途はまだこの外になくてはならない。私は先づ健康を回復してからもう一度出直すべきではなからうか」

かう考へたゴータマは遂に苦行林を出て、村の方へ食を乞ふべく鉢に出掛けるのであつた。

五人組の比丘達は

「彼は可愛さうに苦行に堪へかねて精神が惑亂して仕舞つた。そして

てあれあの通り多欲になつてしまつたのだ。私達はもう再び此處でゴータマを見るべきではない。私達は別の處に行つて修行を續けやうではないか」

さう云つてベナレス市に近いイシバタナ（仙人墮處）へ遅れ去つてしまつた。

捧げられた乳糜

ウルビーラ村の村長セーナラガマの娘ナダバラは、土地の風習に順つて尼拘律樹に向つて

「若し私が同族の家に嫁いで、一番最初に男の子を産むことが出来たならば、十萬金を以て此樹に御供養しよう」

と祈願をこめたことが嘗てあつたが、それが今願ひの通りに實現したので、牛乳の「十六轉精選法」で乳糜を作つて、其樹に供養しようとするのであつた。

この「十六轉精選法」と云ふのは、先づ初めにラツティドウカの林で一千疋の乳牛を飼ひ、其乳を五百疋の乳牛にのませ、それから取つた乳を更に二百五十疋の牛にのませ、其牛の乳を百二十五疋の乳牛にのませ、其牛から取つた乳を六十二疋の牛にのませ、其牛の乳を更に三十二匹の牛にのませ、その牛の乳をまた十六匹の牛にのませ、其牛からの乳を更に更に八匹の乳牛にのませると云ふやうに、それからそれれへ段々精選して行つた乳だけで乳牛を養つては乳を取る方法を行ふ

と、最後には極めて濃厚な蜜のやうな甘い乳が得られる。その最後の乳を更に火にかけてドロドロのお粥のやうなものにして、それを額にかけたニクル樹に捧げようと、今日しも侍女數名と共に此樹のところに来かゝつたのである。

一方ゴータマは托鉢に出かけるには出かけたものの、永い間の苦行で、歩行が困難になつた爲に、丁度このニクル樹の下で暫く休息して居た。ナダバラはゴータマの氣高い清い姿を見て不審に思ひ、

「尊い苦行の聖者のやうにお見受けいたしますが、苦行處から離れて村近い此邊まで御越しになつて居るのは、何か深い譯があつてのことのやうに存じます。女の身で差手がましい次第とは存じますが、餘りにも不審で御座いますから其譯をおきかせ下さいまし」と尋ねるのであつた。

ゴータマは、自分は北のサークヤ族の王様の子であること、道を求める爲めに妻子を捨て、修行に出たこと、色々の聖者に就て道を求めたが何れも眞實の法でないことを知つて、六年程前から此ウルビーラの林に苦行をして居たのだが、それも亦た正しい行ひでないことを今日からはからずも悟ることが出来たので、先づ健康を取り戻さうと思つて托鉢に出たこと、然し身體が衰弱し切つて居るので、今ま此樹蔭で暫く休んで居るのであることなど語り、自分の意願することは他の修行者のと些さか違ふことなど委しく話すのであつた。

ナダバラは非常な感銘を以て聞き入つて居たが

「妾の意願が成就しましたやうに、あなた様の意願も屹度成就致しますこととせう」と祝福して、其持つて來た乳糜を惜しむことなく残らずゴータマに捧げるのであつた。

證悟の瞬間から入信の瞬間へ

乳糜を飲んだゴータマの身體は見る見る内に元氣を盛り返へして來た。

それで直ちに尼連禪河に水浴して六年のアカを洗ひ落し、村に入つて四十九の握り飯を乞ひ受け、草刈人なるソツテイヤから草を貰ひ、畢鉢羅樹の下に其草を敷き、非常な決心を以て、東方西面に結跏趺坐したのであつた。

彼は獅子言を云つた。

「吾れ道を得るまで此坐を起たじ」と。

長年、苦行や瞑想には、人間の限へ得る限りを盡くして鍛へて來たゴータマである。

然し今は徒らに瞑想しようとするのではない。そして徒らに身體を苦しめようとするのではない。

唯だ「聖」を求めんとして思ひ悩むのみである。

けれども今更に思ひ出づるのは年老いたる父王の上であつた。

今既に成人したであらう一子ラフーラの上であつた。

そして獨淋しく空間を守るヤシヨーダラーの身の上でもあつた。

昔を忍ぶ宮殿悦樂の生活！

全印度を統一する王としての名譽！

凡そ人間の考へ得る甘美な空想は誘惑として夫れから夫れへと續いて行く。

それは人間の持つ弱點であつた。

然し有限なものは有限の價值しかない。

それはまた内面の動搖ばかりでなく、外には天候の悪い日もあつた。

雨の日も來た。風の日も來た。

天地を轟かす暴風疾雨、萬雷鳴り響く日もあつた。

内魔！ 外魔！ 人間として誰でも味ふ恐怖や困惑さへもが襲つて來た。

然しゴータマはそれらの有限なまぼろしを對治すべく一心に無限を念じたのである。

それは十種の波羅蜜であつた。

施と戒と忍と勤と禪と慧と方便と願と力と智と。

惡魔はゴータマに尋ねた。

「施波羅蜜を行つたことに證人があるか」

「ある。此の大地こそは證人である」

大地を踏むことなくしては生活し得られない人間に取つて「大地こそ證人である」と云ふ言葉は誠に最も偉大なる證言であつた。實に天

地を震撼せしむるに足る程の證言であつた。

遂に大地は振動した。そして最も執拗な心内の惡魔は屈服したのであつた。

瞬間にゴータマの心内には知覺が開けた。

智慧の眼が開けたのである。

謂ゆる明鏡止水の心境である。

それはゴータマ三十歳の十二月七日の夜の第一刻であつた。

闇が退いて光がさしたのである。

更には第二刻に到つて感情の眼が澄んで來た。

即ち澄淨の擴大である。

無量壽經には

「肉眼清徹して分了ならざるなく、天眼通達して無量無限、法眼觀

察して諸道を究竟す」

と云つて居るが、私達凡人の眼は先入主に禍ひされて、兎もすれば感情的に曇つて、正確に物事を觀察することが出来ないものであるが、

ゴータマは此時法眼に依つて天地一切の現象を如實に見ることを得た

のたである。

苦の因は生存であり眞實ならざる生活である。しかもそれは有因の存在觀念からのものである。

更には其有の觀念は執着（取）、執着は愛欲、愛欲は順次に受（感覺）、觸（接觸）、六入（五官并に心）、名色（對立意識）、識（認識）を原因と

して、派生したものであるが、それも根本的なものとしての無明（盲目的な意志）に依る行（精神上の色々な作用）が間違ひの基となつて居るのである。此の十二の段階は夫々相互に因となり縁となつて、愛欲とそれに依る行爲と結果としての苦惱とを増進させつゝ、より一層大なる矛盾へと迷ひこませて行くから、事物の正しい認識が出来ず、宗教的な清く高い感謝も感激もない生活のまゝに一生を無駄に過してしまふのが私達なのである。

然し、現在の苦と感ぜらるゝものを唯だ有るがまゝに觀察するのでなく、その普遍妥當な本質を把握せんとする最も深刻な觀察は極めて困難なことで、するどい理智と先入主に邪魔されない感情とが公平に働かないことには、兎角横道へそれてしまつて正鵠を得ることは出来ない。

ゴータマは其夜の第三刻即ち最後の刻に於て之の十二通りの因と縁と果とを順観し逆観した。その結果として遂に得たものは

「無我の大道を歩むこと」

であつた。そして感情的には

「一切のおかげに依て生かされて居る」

と云ふ敬虔な氣持であつた。

世に「我」を知ること位むつかしいものはない。ゴータマの到り得た「我の我とすべきものなし」の悟得は非常な般若からである。

考へて見れば我の我として有るのは天地一切の恵みの結晶なのであ

る。

然かもそれは決して個々のものが個々別々に我をはぐゝみ育てて居るのであるとは思へない。

天地萬物一切の力が順逆共に我か一身に集注されて居る此嚴肅なる事實は、決して個々別々のバラバラな意欲に依つてなされて居るものではないのである。

天地萬物の一切を網羅してしかも天地萬物一切の裏に働くところの意欲即ち「願」とでも名付く可き大きな力があるからではないだらうか。

天にあつては「虚空藏」。地にあつては「地藏」。萬物にあつては「萬法藏」。

さうだ。そこに普通の常識では知ることとも見ることとも出来ない「神秘」があるのだ。

それが「法」なのだ。それが「佛」なのだ。そしてそれが自分の生きる上に取つての「おかげ」なのだ。それがまた「恵み」なのだ。そして其處に初めて「我」の本當の姿がハッキリ見えて来るのである。

ゴータマは八日の天明に及んで非常な感激を覺えた。始めて確信に達したのだ。

東の空は黎明に明るくなつては居るが、曉の明星はゴータマの「證悟」を讃美するかのやうに淡い光りでまたゝいて居た。

静かな明け方だ。

天地はまだ静寂で、活動の一瞬前だ。

不動の姿であつたゴータマは静かに静かに兩手を擧げて胸の處に合掌した。そして高らかに一聲叫んだ。

「南無大方廣佛！」

證悟の瞬間は即ち入信の瞬間だつたのだ。

無我の大道へ

「私と云ふ家を建造した者は誰であらう。幾度も幾度も苦しい生を流轉してそれを求め歩いたが、容易には見出し得なかつた。

家の建造者よ。

お前は今ま漸く見出されたのだ。

私はもう再び家を造らないであらう。

梁や棟木が碎かれてしまつたからだ。

私の心は既に滅盡の境に入つて、すつかり愛欲が斷滅したからだ」

ゴータマはから謠つて暫く法悦に浸るのであつた。

ニグロッド樹の下で七日間。

實に輕安の喜悅である。

ムチャリンド樹の下で七日間。

それは天候が悪く雨が降り風が吹いたからでもあつた。

然しそれでもまだゴータマの法悦境は消えなかつた。

天候は回復したが、彼は更にラーヂヤヤタナ樹の下で七日間を過こ

した。

タブツサとバツリカと云ふ二人の商人が通りかゝつて粥と蜜とを獻じた。

彼は再びニグロッド樹の下に來て考へた。

「私が得た眞理は深遠で、聖賢のみの知り得るところのものである。然るに一般の衆生は『慾の住居を樂しむ、慾の住居に執着し、慾の住居に満足して居る。』

かゝる人々には此眞理を話しても分つて呉れないかも知れない。それは唯だ倦怠と苦悶とを感ずるだけなのであらう。

だから私は此眞理を衆生には話さないことにしよう」

から思つて居ると天の一角から

「世尊よ。薄伽梵は法を説かねばならぬ。善逝は眞理を説かねばならぬ。

人々は色々である。法を聞いて了解する者もないとは決して云へない」と云ふ聲が聞えて來た。

「さうだ。法を得て法を擲り占めにすることは間違ひだつた。人々に佛性のある限り、眞理を求むる爲の理解と信仰とがあつてよい筈が。況して私の得た無我の道は一切の人々を眞の幸福へ誘ふ大道なのだ。よし。私は身命を賭しても人々に此眞理を説かり」

かくてゴータマは覺者としての自覺に立ち、覺他への覺行に邁進すべくカーシーの都をさして旅立つた。

(をばり)



人ひとは佛ほとけになれぬか

—— 續「犬・猫・人間・佛」——

佐藤 賢 順

趙州和尚が或る僧に、

「犬には一體佛性があるのでせうか、それともないのでせうか。」と問はれて、言下に「無」と答へた。その「無」は有るに對する無いではなくて、その兩方を超えた無であつて、有と言つても同じことである、といふことは既に述べたところである。

我々は更に問を進めて、佛性は犬にさへある位であるから、勿論人間にも有るに違ひなからう、有るとすればその佛性とは如何なるものであらうか、それは誰にでもあるか、また、如何にしたからその佛性を開顯して、生きてゐる通りの、在るが儘の、この日常的な人間が、佛となることが出来るのであらうか。然し又、果して人間が佛となるといふやうな事が可能なのであらうか、可能であるとするれば問題はないが、不可能だとすれば、どうしたら良いであらうか、喜びと悲しみの、寄せては返す波のまにまに永劫に浮きつ沈みつしなければならぬのであらうか。など、いふ聯

絡のある一組の問題を考へてみよう。

人間には十人十色のそれぞれの性格が、宿命的に烙印として押されてゐる。その上に、環境や教養や、職業の制約を受けてゐる。人間の知識にも限りがある。人間の行にも力にも限りがある。然しこれらの制限に加へて、更に根本的な絶對的な制限がある。時間的有限性——死といふ制限が、他の制限と共に、人間を迫手擲手に征めるのである。人間の性格は限りがあるといふことである。

然しこの有限性は、今この机の上にある本や茶碗やペンや、また窓外にある庭石や樹木の有限性とは甚だしく異つてゐる。それらが有有限であるのは、全く固着的な意味に於いてであつて、それらの物は自分からその有限性を縮めたり擡げたりすることはできない。然るに人間が有有限であるのは、流動的な昇降的な意味

に於いてとあつて、人間は自分の力で自分の有限性を縮めることも擱げることとできる。つまり無限への可能性を徐々に打ち開くことができるのである。人間の有限性は固定的な有限性と眞の意味に於ける無限性との中間にあつて絶えず昇降する有限性であると言ふことができる。

であるからこそ、人間には種々なる段階が區別せられるのである。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛といふ十位の段階も、人間の各々の状況を指すものに外ならない。地獄とは石か瓦のやうな人間、詳しく言へば固定的有限性に縛せられた人間で「地獄人間」と言ふべきであるし、餓鬼は胃袋だけのやうな人間、畜生は性慾だけにしか興味を持たない人間、修羅は名譽慾だけが旺盛な人間と言へよう。第五の人間に至つて漸く常識的な日常平均的な人間になり得る。ずつと昇つて菩薩と言つた所で、別段人間と無縁な者ではない。嚴密に言へば「菩薩人間」である。古い頃の部派佛教でも「菩薩はなほ異生（凡夫のこと）にして諸結（色々の慾望）未だ斷ぜず」と言つてゐる。慾望を備へた在りの儘の人間そのものに、無限性への可能が秘められてゐる。同じ頃の説に「異生位の中に聖法あり」と説いて、どのやうな凡夫にも貴き聖き性質が秘められてゐると教へてゐる。この可能性こそ佛性に外ならない。

佛性とは、それならば、何であらうか。先づ佛性は個人個人が

各別に持つてゐるものと考へてはならない。この謬見を破らないと先へは進めない。個人が銘々別々に持つてゐないといふ點では無であるが、而も人間は佛性を前提しなくては生きられない、各人に佛性の胚種が秘められてゐるといふ點では、それは有である。

佛性を明かにする爲には、個人的な私の迷妄を打ち破つて、人間に就いても人間以外の存在に就いても、正しい反省と認識とが得られなければならない。佛教を他の諸の宗教から區別する特徴は「諸法無我」といふことである。諸法無我——諸の存在にはその個別的な實體はないといふこと——これが佛教の根本思想であり、諸宗それぞれ説く所を異にしても、佛の教であるからには、他の點に於いては兎に角、この點だけは缺くことはできない。佛性の正しい了得はこの智慧が得られて後のことである。

そこで佛性とは無我或は（同じことであるが）空の反面であり、それに相即するものであると言へる。「すべて凡夫も聖者も共に空を以て其の本質とする。といふのは凡夫も聖者も空より出てきたのであるから、空はこれ佛性である」と世親菩薩は書いてゐる。世親は又言つてゐる「佛性とは人間も人間以外の存在も共に空であるといふことが顯はした眞如である」と。人間も人間にとつて對象となる一切の存在も共に空であるといふ正しい認識は、第一義空である。「佛性は、第一義空に名づく、第一義空は名づけて智

「惠をなす」といふ涅槃經の經文は貴い。佛性は人間にのみあるとは限らない。ありとあらゆるもの、根柢にある共通の地盤であり、もの皆は其れによつて生きゆくことができる依り所である。

私達は無我とか空とかいふ否定の道を通つて兎も角も佛性を一瞥した。然し佛性は單に無我や空といふ消極的な一面だけに盡きるのであらうか。決してさうではない。否定の道を通つて一層積極的な佛性の姿を描き出すことこそ今の目的でなければならぬ。

諸法無我といふことを根柢として、それから當然引き出されて来ることは、諸行無常へ諸の現象は變化するといふことや、一切皆苦へ存在や現象を變らぬものとして愛着するから苦惱が生ずるといふことで、私達はかやうな見方にならされてゐるが、このやうな見方だけだとすれば、佛教は餘りに憂愁で暗鬱だと言ふより外はない。佛教思想の特色は、無常・苦・無我・不淨といふ四つの根本的な見方であるといふやうにも言はれてゐる。いづれにしても否定的な側面ばかりである。然しかやうな否定的な考へに停滯せずに、涅槃經の所説に従つて私達は大飛躍をしなければならぬ。

「佛性は常・樂・我・淨なり」——佛性とは常住不變のものであり、大きな意味の我であり、従つてかゝるものに屬しかゝるものに依

つて生きる法は凡て淨きものであり、かゝる境地に生きることは樂しきことである。これは今まで私達が聞き慣れてゐる思想と全く逆の考へ方である。一度否定の道を通つて、個別的な存在の迷妄を打破した上は、このやうな全く反對の肯定の道を歩むことが出来るのである。茲に一言言ひ添へて置かねばならぬことは常・樂・我・淨のそれぞれは、いづれも無常・苦・無我・不淨に對立する反對の考へではなくて、常に於いては常と共に無常が同時に眺められ、樂に於ては苦も樂も超え出でられて樂が樂まれ、我に於ては我と共に無我が眺められてゐることである。それは大常・大樂・大我・大淨である。それは又、中道であるとも言はれる。中道とは右でも左でもない眞ん中の道といふやうな手溫い道ではない。右をも左をも踏み越えてしまつて高く歩む道に外ならない。「中道とは名づけて佛性となす」

かやうな輝かしい生命への可能性が、人間には皆覆ひ包まれてゐる。それは單に認識とか思惟とか反省とかいふ限定的な對象ではない、眞理といふやうな冷徹なものではない。それは生きてゐるものでなければならぬ。

さて、ところで、人はこのやうないみじくも貴い佛性を開顯して、佛と成ることが出来るであらうか。私は今回も亦紙數の都合上「人間・佛」を語らうとしてその後半を次回に譲らねばならぬ。

俳壇

大田 耳動子



蘊草活けて小し居間の春

弘前市 安藤すが江

評 「蘊草小し」と云ひ、「居間の春」と云ふことから新麗に片附いてゐる。蘊草位の部屋が想像される。「居間の春」といふ季節はこのまゝでは歳事記にはなく、作者のはたきによつて作り出された正月の季節である。「おらが春」「庵の春」「御代の春」等は同じ部類に属する季節である。

昔の宗匠は一句の中に季節を二つ以上用ふることを許さなかつたさうであるが、それは智能の低い人々に説明しても通じないからであらう。今では、之を便宜上區別して、中心となるべきものを季語と云ひ、他を季感と云つてゐるやうである。

葛飾 岡本 素水

部屋隅に少し残れる冬日かな

評 句意は誠に簡単であるが、此の事から暖かな冬日が一日中當つてゐたのを想像することが出来る。どこことなく果なさを感ぜさせる句で、小さく書ふれば、サリリマンの樂しかるべき体日も三分の二過ぎて了つたやうな、大きく書ふれば、華やかな人生も傾きかけたと云ふ感じである。

満天の星の一つに母星も

平塚府 三浦 幸榮

評 私は何つて、こんな事を考へこんな句を作つたことがある。夜、地上へ降りる露は、あれは人間の靈魂ではないかといふことである。人が一人限りに就くと一つの露が地上に降りる。数限りない多くの人が地に就くときは数限りない多くの露が地上に降りてゐるときである。之と反對に、夜が明けて、一つの露が消えてなくなると、人が一人眼を覺まし多くの露が消えるときは多くの人が眼を覺ますときであると。そして出来た句が

露の魂をこらげて人の眼覺めたりといふのである。

「満天の星」の句にも、私の右の句と相通するやうなものを見てとれる。

表面の句意は「満天の星」の中には父星もあらう母星もあらう、といふのである。特に「母星も」としたのは、昨者の母を慕ふの念が切なるものがあるからであらう。斯う考へ来れば、作者のお母さんがもう亡くなられてゐるのかも知れない。

「満天の星」は、この體では季節にはならないけれども「天の川」或は「星月夜」のやうに秋を感じさせる。

大坂市 吉廣 夏生

東京市 宮本 清子

明日の糧思ふほかにも寒さかな

青森市 高松 秋水

雪深く暮るゝに早し窓の月

越中 藤田 四三九

春めきてつゞけさまなる出水かな

東京遠草 鈴木 白舟

こぼれ炭雪解の道にかわきある

新義州 球 磨 薩

寒念佛壇も通はぬ星空に

小倉市 増谷 やすを

鹽田の屋根の白雪煙断ち

同 同

カチ／＼と時計の音も寒の入

下関市 中尾 碩 鐘

北風に震ふ庭木の折れもなし

東京市 新田 眞 砂

打ち揚げし岸の木片に陽炎へる

石川縣 西村 鎌治郎

稲刈や稲をふり／＼兵送る

京都府 郡司 島 誠也

山肌のぬくとさに居て春うら／＼

大連市 内 藤 豊 海

雲空低く御忌會の誘ひ鐘

熊本市 牛島 青 丘

乳色の雲に日かけり春寒し

東京王子 三野 輪江雪

ぼた／＼と氷柱のとけて雪沓かわく

東京遠草 鈴木 白舟

春寒や茶毘の煙りの山おうて

大分縣 石堂 柑山生

電線を流るゝ雪春の雨

佐世保 上田 山 梔子

顔せに軒雪ひゞき春の風呂

朝鮮京城 泉本 美代子

寒行の鐘の音とがる寒さかな

千葉縣 屋代 吟 風

月光に捨小舟見て歸る雁

東京市 大河内 のぼる

友の家探しあてゝの暖かさ

東京市 小野 秀 星

ベル響く汽車によりそひ息白し

茅ヶ崎 岡田 良 田

麥ふむや巨き機影を落しゆく

宮城縣 赤井 澤五 屋

朝寒に白衣の勇士迎へけり

滿洲 長谷川 夏 彦

氷柱とけ滴り春をいざなへる

群馬縣 高 原 香 風

一人麥ふむや雲雀にまだはやし

東京市 岡田 藤 子

芝に入るべからず柵の萌えそめぬ



小説 靜御前

(完結篇)

今野賢三

鈴木金平畫

一

やゝあつて政子は口をひらいた。

『君が流人となつて、伊豆に居られましたところのことを、よもや、お忘れではありませんまいが』

『それと靜のいまの和歌とは、なんの關係もないではないか……』
頼朝はますます不氣嫌な顔を見せながら、それでも、政子の言葉を
けいんさうにうけてこたへた。

『その伊豆においでのところ、君と妾とふかく契をかはした仲だと知つ
てゐても、父御、北條殿は、あのとほり、うつたへられては事面倒と、
平家の一族の、兼隆へ妾を嫁入らせようと思いました』
『いまだき、左様な昔のことを』

『そのとき、妾はどうしましたか？』

政子は、非常に熱心な口調になつて、

『たとへ、父御とは敵となりませうとも、契り交した仲であつてみれば、君にしたがふの當然だとかんがへて、雨のはげしく降るあの眞夜中に、山奥へおあと慕つて、父御のもとから逃げて行きました』

『それはすぎたこと』

『いゝえ、話さねばなりません。まづ、御聴き下さい……』

『……』

『また、石橋山の戦ひで、君の御行方知れずになつたときも、妾は、お言葉にしたがつて、ひとり山中に残り、夜も晝も、思ひなやんで、涙にくれてゐたころのうちは、ちやうど、静の今の心中とおなじことだと思ひます。もし、静が、豫州とのちぎりを忘れて、戀ひしたはなかつたなら、貞女といれませうか！ 妾がもし、君が流人となつたあるとき、戀ひ慕ふころをわすれたら、いまごろ、どうなつたことでせうか？』『そのことは』

『わかつてゐるとのお言葉でしたら、静の心中も、察してやつてよいこと、いゝえ、貞女として、賞めてやつてもよいことだと思ひます』

『……』

『殊に、只今、ごらんになつたあの藝の見事さは、どこからあらはれてをりませうか？ 心内にあれば外にあらはるゝとか申されるとほり、豫州にたいする戀慕のやさしいころが、歌や舞となつたればこ

そ、眞實。いつはりのない、名人の藝を見ることができたのだと思ひます。君には、まげて、賞めつかはして下さりませ……』

政子の情理をつくしたキツバリとした言葉に頼朝も怒をやはらげないわけにはいかなかつた。

まもなく、平伏してゐた静がよばれて、御苦勞であつたといふ政子の言葉とともに、殿中から押し出された、褒美の『御衣』をおしいた。

頼朝夫婦が殿中を立つたあとで、工藤祐經のかたはらへ、あわたくしくちかよつた景茂が、耳へ口を寄せて囁いた。

『のう、祐經殿、あとで、静のもとへ酒を汲みに行かうぞ、』

二

鎌倉の、静の宿は、兵卒どもにとりまかれてゐる。その息苦しさを感ずることはなかつたが、それでも、身邊に監視の眼が、たえずひかつてゐることを、直覺しなければならなかつた。つまり、敵中に身を置く、といった不安には、眠る間も、おびやかされてゐなければならぬのであつた。

祐經と、景茂が、その静の宿を訪ねたのは夜のことであつた。

静は、燈臺のわびしい灯のかたはらで、豫州さま（義經のこと）のその後の消息は、どうかしら？ と、思ひなやんで、一人、臉を伏せてかんがへしづんでゐた。それにまた、やがて生れる、愛兒の運命

が、暗澹として眼さきにもちらつき、ひとりでに、溜息を吐かないではゐられなかつた。

祐經と、景茂は部下に持參させた酒や肴をならべて、靜の前にとつかりと腰を下した。

祐經は平然と微笑をふくみ、景茂は顔を赤らめて、爐傍の魚をねらふ猫のやうに小さくなつた。そして、うつとりと眼をほそくして、靜の顔やすがたをなめるやうに見まはした。

「このあひだの舞ひは、御みごとちやつたのう。感心つかまつた。鼓をもつた此の工藤も、面目をほどこした。そのよろこびに、持つてきた此の酒肴……」

御 此の二人とも、名のある武將であつてみれば、靜とても、いやな顔を
をするわけにはいかなかつた。

「あなたさまの鼓の御見事さにくらべますと、わたしの藝など、どんなにかおほづかしいものでございませう。それにいたしましたしても、ほんたうに、ありがたうございました。どうぞ、御ゆつくりと、おくつろぎなされて、おものがたりなされませ。お相手いたしますほどに」

「藝ごとの話はのぞむところ」

祐經は肩をゆすつて、他意なさうに笑ふと、それに釣られた景茂も、大きく口を開けてうれしくてたまらないといったやうに高く笑聲をひびかした。

靜は瓶子をとつて、二人の盃にかはる／＼酌をしては、祐經と、

京都でこのごろはやる歌舞のはなしをつゞけてゐたが、そのあひだに景茂は、靜の横顔に強く視線を喰ひつかせたまゝ、全身をくづして、だらしない酔體に變つてきてゐた。

しばらくたつてから祐經は、急になにか思ひ出したていで、

「とんと忘れてゐた、ほかに用事があつたのぢや。梶原殿、ゆつくりせられい……」

と簡単な言葉をのこして、あわたよく出て行つてしまつた。

そして、二人きりになると、妙におもくるしい氣分がたゞへられ、灯影にうつむく靜の顔にも、困つたやうな表情がうかんできた。

つめたく外からながれ込んだ風のため、灯がボツとゆれると景茂が妙な笑ひ顔をもたげて、靜のかたはらへにじり寄り、眼と手眞似で、露骨なさゝやきを示しながら、

「どうかのう靜どの、ものは相談ぢや、此の梶原が妻となつて、ながく鎌倉に住む氣はないか？ 主君へのとりなしは、どうでもできる。女一人では、さぞ、淋しいことであらう。此の相談に乗つてはくれまいか？」

一言、一言に酒の息をこめて、靜の頬へしつこく吐きかけた。

それから、景茂の両手が、前へ泳ぐやうにのべられて、靜の肩にかみかゝつたが、咄嗟に身をかはされたので、几帳へ首を突込むと、這ふやうにつぶれてしまつた。靜はいきどほりの聲を震はせた。

「あなたは、此のわたしを、どう思つて、そのやうな、いやしい眞似

をなさるのか？ さ、それを聞きませう。わたしは、豫州さまに愛され、身をさへげてつかへるもの！ 豫州さまは、そなたの主君鎌倉公のまことの御弟！ いはゞそなたは、わたしにとつても家來の身分

ではないか。豫州さまが、もしいまこゝに居られるなれば、わたしの顔見ることさへもできぬ家來の分際！ そのことをかんがへたら、いまのふしだらな眞似を、武士らしく慙ぢ

なさるがいゝゝゝゝ

景茂は此の明瞭な言葉に、思はず首をちよめて、ゐたゝまらなさうに顔を伏せてしまった。

三

さうして、あぢきない思ひで、鎌倉で月日を送つてゐるうち、靜はやすらかに男の子を産んだ。

或る日、安達清經が、靜の宿へ頼朝の命令であらゝしく踏み込んだ。

『その兒を、こつちへよこせッ』
大きな聲で叫びたてた。

靜は愕然として、赤ん坊を、身をもつてかばふやうに兩袖で蔽うた。

『わたすことはなりませぬ』
きつぱりと言ひ放つた。





「鎌倉公の命令をそむかるゝか？」

清經は威丈高になつて罵つた。

赤ん坊は、靜の袖の下でワツと泣き聲をあげた。

「此の若君になんの罪がありますか？」

「いふなッ。そのけ」

「いゝえ、のきませぬ」

「斬られてもか？」

清經は大刀に手をかけた。

「若君が助かるものなら」

「うゝむ、しやうのないこと」

「さつ、若君のかはりにわたしを！」

「面倒なッ」

清經は前へ踏み出して兩手をのべた。靜は必死にその手を拂ひのけようとした。が、つぎの瞬間、肩先を、力をこめて突かれ、うしろへのけぞつたところを、清經の眼くばせで、家來たちが走り寄つて兩手をしつかりとつかまへた。

そのひまに、赤ん坊はやすくと清經に抱きあげられてしまった。

靜はワツと號叫して、家來どもの手をすべりぬけ、髪をみだし、裾を蹴つてとびかゝつたが、横



腹をしたゝか蹴られもろくもうしろへ倒れた。だが、それも一瞬間で、死にものぐるひの氣持で跳ねおきた。そのとき、清經はもう、ゆらくと、赤ん坊を抱へて外へ出てゆくところであつた。静は、聲も張りさけるほどに泣き叫んだが、家來どもは前へ立ち塞がつて兩手をつかまへ、一步も動さうとはしなかつた。

四

安達清經が、うばひとつたその兒を殺して、由井ヶ濱へ棄てたあとへ、半狂亂になつて走せつけたの靜ではあつた。

波打ち際を、彼方に走り、此方に駆けもどり、いくらさがしても、もはや、わが見らしいなものも、見つけることができなかった。ときには、聲もあらはに、淺瀬をすゝんで、水中をひつかきまはしてみ

た。ときには、砂の上にすわつて、氣拔けがしたやうに、ぼんやりと海面をながめてから、兩手で顔を蔽うて嗚咽の聲を呑んだ。

（あゝなんといふ世の中であらうか。世を治め、ひとの上に立つ、鎌倉公ともあらう御方が、血を分けた弟の子を殺さねばならぬとは、なんといふことであらうか！）

いくら、かう、心で叫んでもたりないのであつた。

（それにしても、御藥所さま、いゝえ、わたしにとつては姉にもあたる、政子さま！ 君を慕ふ貞女のこゝろを知つて居られるお方なら、子を思ふ母のこゝろも、どんなに強いものかわかつて下さるはず。いや、おわかりにならぬはずはないのに、子をうばひとらせ、殺させる、そのひとの妻として、平氣である！ それが妾にはうらめしい！）さうして、いくら泣いても、いくら、うらみごとを心でくりかへしてもたりなかつた。

へなんのために、あれほどの家人をしたがへ、あれほどの勢力をもつてゐる鎌倉公ともあらうお方が、義經の子だといふ、たゞその一つの理由で、無残にも、殺さなければならぬのであらうか？ それは、ほかでもない。自分だけの安全をはかるためではないか。平家を亡ぼすに、あれほど功績のあつた肉親の弟をも亡ぼし、その子の生命を

も断つといふのは、自分の安全のためではないか！ さうだ。それにちがひない。憎悪いのはその心根だ。それでは、人間とは、みな、さういふ勝手な、残酷なものなのか？」

静には、これ以上、考へることができなかつた。あたまがみだれて、つぎからつぎへと湧く、嗚咽に喉をふさがれるだけであつた。

『もし、ちよつと、おねがひがあります』

静はふと、年老いた漁師が二人、魚籠をかついで、背後を通るのを見つけ、或る喜びを顔に現はして一生懸命に叫びながら駆け寄つた。

『わたしが、いくら、探しても、見つかりませぬ……』

さう言つて海中を指さしながら、

『わたしの赤ん坊が、たしかにこゝへ、捨てられてしまつたのですから、せめて、死骸でも見つけたいと思ひまして……』

灰色のきたない手で顔をうづめた二人の漁師は、けいんさうに静の顔を見つめて、そのなげきの表情から、なにもかも察したといふやうに、顔見合せ、うなづき合つて

『その赤ん坊を？』

さがしてくれといふのかと、静にむかつて、眼顔で訊いた。

『このとほり、おねがひいたします。このとほり……』

静は思はず、両手を合せてあたまを垂れた。

『それはまず、氣の毒なことですねえか』『さうだて』『さがしてやらねばなるめえよ』『うむ、氣の毒なことだ……』

二人はこんな會話を交しながら魚籠を砂におろして、潜に眼をやリ、それから、ザブザブと浅瀬へはいつていつた。前かゞみに、海水をひつかきまはしたり、ちつと水面を見つめたり、左右を眼でさがしたり、また遠くへ視線を走らせたりしながら、膝まではいつてゆき、さらにまた股まではいり、それでも見つからないために、こんどは下半身から乳のあたりまでも海中に没してさがしまはつた。

そして、一ときあまりも、熱心にさがしまはつたあげく、とうく見つからずにひつかへした。

静は死骸の見つからないことに失望したけれども、この二人の漁師にはどう感謝していいかわからないやうな感動に、思はず、砂の上に膝を突いて、あたまを垂れなければならなかつた。

『そんなに禮などいはねえでもいゝよ。氣の毒なことだの』

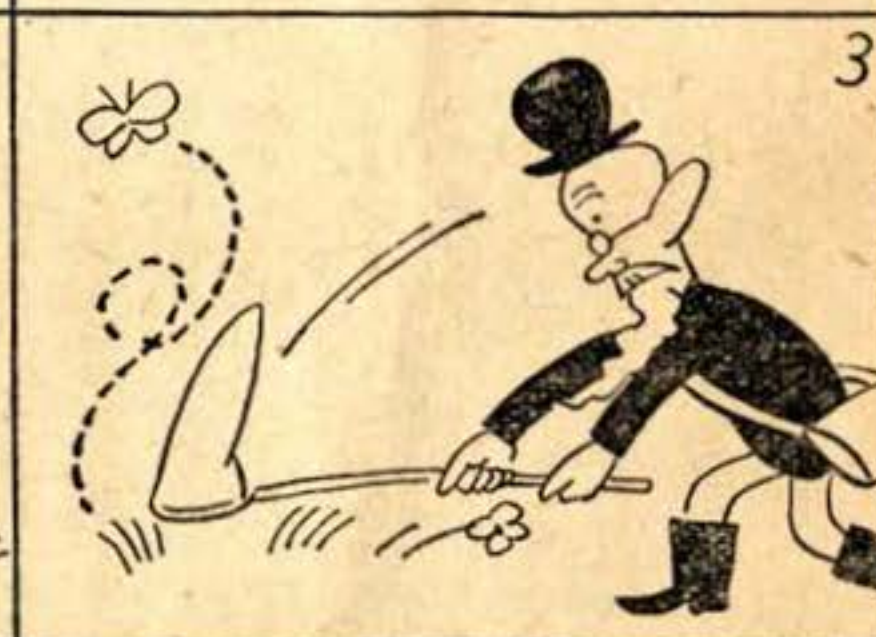
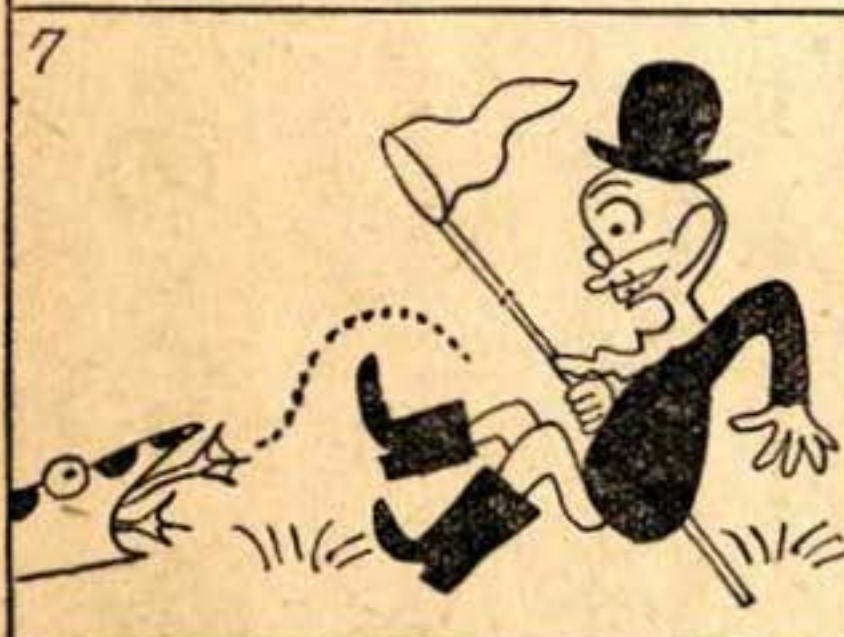
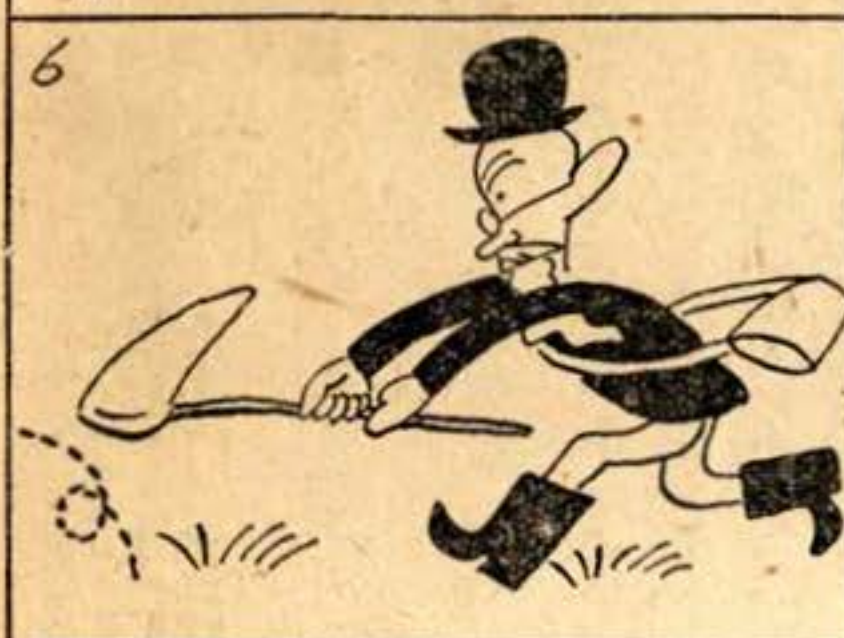
二人の漁師は、たつたこれだけの言葉をのこしてさつさと立去つた（此の漁師たちの、あたゝかな心と、あの、人の頭である、武將の頼朝と、どう、くらべたらよいであらうかどつちが、ほんたうの人間であらうか？）

静はから思つたとき、また、あらたに湧いた涙にむせんで、遠ざかつた二人の漁師のうしろすがたを、思はず、手を合せて拜むやうな氣持になつたのであつた……

静は間もなく、放たれて京都へ歸つて行つたが、それからどうなつたか？ 生涯をどうして終へたか誰も知つたものはなかつた。（終り）

夫 羅 比 羽 大 畫 漫 幕 字 無

トンダ昆虫採集





信・仰・座・談

鐘詰の宗教

中野 尅子

□「どうも、宗教といふことが、わかつたやうでわかりませんが、一體、宗教といふことは、どういふ事でせう」

○「それは、わからぬ筈ですよ。

金魚が水の中にあるから、水が眼につかぬやうに、宗教が眼につかぬのは、宗教の中にあるから本當は宗教がわからぬのです。宗教とはコンナ物だ、アンナ物だと掴んだ宗教は、實は宗教の片鱗であつて、宗教の本體、宗教の全體そのものぢやありません。だから、

わからなくとも、わからぬが儘で實はハッキリしてゐるから、心配はナイですよ」

□「ところが、ちツともハッキリして居らぬから心配です」

○「ハッキリしてゐるですよ。

金魚が一口、一口、水を吸つたり吐いたりしてゐるやうに今、アナタは一息一息、宗教を吸つたり吐いたりしてゐるぢやありませんか。こんなハッキリしたことはない」

□「そんな宗教を——吸つたり吐いたりしてゐるな」と謂は

れては、少しもわかりません。宗教は、神や佛を信することぢやないですか」

○「あれは、宗教の鐘詰です」

□「宗教の鐘詰——？」

○「宗教を鐘詰にして、レッテルを張つて賣つてゐるのです。これは神で御座い、これは佛で御座い。これは佛敎で御座い、これはキリスト敎で御座い。これは淨土宗で御座い、これは眞宗で御座いと廣告して賣出してゐるのです。牛肉の鐘詰を開けて、コレを

『牛』だと思つては間違ひです」

□「それぢや、佛教やキリスト教や、淨土宗や眞宗は、皆、ウソだといふのですか」

○「ウソだといふのではないが『牛』といふのは、あのモーと啼く奴でせう。鑑詰の中に入つてゐる牛肉は、牛でないのではないが、牛ぢやないでせう。今、アナタは、鑑詰入りの牛を要求してゐるやうな事を云つてゐるから、それでは間違ひだ、それでは本當の牛はワカラヌといふのです。私は、あのノソリノソリと歩いてゐる『牛』を云つてゐるのです。それで同じ『牛』『牛』と云つてゐるのでも、私の牛と、アナタの牛とは『牛』が

喰ひ違つてゐるのです。だから私は、ワカシクて仕様がな

いのです」

□「どう、をかしいのです」

○「アナタは、鑑詰の牛肉を見て牛だ牛だと云つてゐるからをかしいのです。そして牛肉の鑑詰を求めるやうなつもりで、本當の『牛』を求めてゐるから尙更ら、をかしいのです。そんな牛は放かッて置いて、『活きた牛』を探さない。『活きた宗教』を探さない」

□「私は、ソノ活きた牛が求めたいのです。活きた宗教が見出したのです。ところがソノ活きた宗教が得られぬからそれでわからぬ——わからぬと云つてゐるのです。私も鑑詰の牛肉や、鑑詰になつた宗

教の一年生の課程なら、もう開いて見た氣がします。一鑑位は喰つて見たつもりです。

だから、ソレに満足して居らずに活きた牛を追つてアナタのところへ來たのです」

○「それなら、私の處——へ來てはいかぬ。牛を探がすなら牧場へ行かなくてはいかぬ。活きた宗教を求めるなら、如來のみ下——へ行かなければいかぬ。アナタは、活きた牛を求めるなソと云うてゐても矢張り鑑詰屋の鑑詰の中を、ガラ／＼探がしてゐるから、それでをかしいのだと、先きから云つてゐるのです。ハッハッハッハッ……」

□（默す）

○「どうです。わかりましたか。

太平洋が知りたけりや、太平洋の中へ躍り込まねばいかぬ。アナタは試験管を振つて、その中に太平洋の怒濤を見よ

□「……」

○「アナタは、活きた宗教を求めてゐる、活きた宗教を求めてゐるというても、矢張り古い求め方をしてゐる。今迄の死んだ宗教の求め方をし乍ら其儘、活きた宗教が求められぬ／＼と歎いてゐる。それでは求められぬのが當り前ですよ、わからぬのが當り前ですよ。新しく得ようとする者は、新しく、方法も、所謂、百八十度大轉回をやらねばなりません。それをせずに、わからぬ／＼と云つてゐても、いつ

までたつてもわからぬだけです。それで私は、をかしくて仕様がなのです」

□「それぢや、どうすればいいのです」

○「私の處——へ来るのではなく、アチラへ御出なさい。百八十度轉回です。コチラへ来るのではなく、アチラへ行くのです。廻れ右——です」

□「アチラへといふのは、ドチラへです——」

○「アチラといふのはアチラです。アチラであつて、コチラではない——」

□「……」

○「水——といふのは、水岸に立つて、水を見てゐるだけでは、まだ水はわからぬのです。水の中でドボーンと飛び込ん

で濡れ鼠になつて、初めてコ

レが水かと『水』がわかるのです。アナタは水岸にも立つて居らぬ。況んや水に濡れたことも、水を飲んだことも無い。水とは、化學方程式で、 $2H_2O$ に $2H_2O$ だと黑板に書いて習つてゐるだけです。佛が——どうだ。神が——どうだ。宗教が——どうだ。といふても、皆、方程式で習つてゐるだけだ。定義を知つてゐるだけだ。水の中へ飛び込まねばいかぬ。せめて茶碗に一杯でも酌んで飲まねばいかぬ」

□「よくわかりました。私もソノ水を飲みます。本當の宗教を求め、本當の佛を信じます……而し、その水の有る方向

がわかりません」

○「ハツハツハツハ……。十方法界、天地に彌漫です。アナタもさう云つていつも説教してるぢやありませんか。上下左右、どちらへ行つても得られます。辨榮上人は、如來の在さざるところなきが故に——

——と云つてゐられます。實は一番初めに云つたやうに、金魚の如く、既に水の中に居るのだから、得られない譯はないのです。心配せぬでもいゝ、困らぬでもいゝ、安心してゐていゝ、必ず容易く得られます。水を得るには川岸へ走つて行けばいゝが、間違つて山の中へ走り込んでも、必ず山の中でも得られます。立つてゐる巖石を打ち砕いて、地下

へ掘つて行つてさへ得られる。本當に得る氣であつたら、必ずどんな處で——でも、何時——でも得られます。心配したことはない。道心——さへ有れば……です」

□「よくわかりました。わからぬが儘でわかりました。求める元氣だけは非常に出て來ました。必ず、いつかはアナタにも喜んで頂けます」

○「さうです。而し、わかり方が少々早いですなア、而しその勇氣です。その求道心です。ココに面白い句がある。これは、大念佛者、九州博多の萬行寺の七里恒順さんが、好んで口誦まれた句で、中にゐて中と思はぬ霞哉といふのがある。これは非常に



四月七日 法然上人の御誕生

■■■■■■■■■■

われらの鎮仰する宗祖法然上人が誕生になったのは、今より八百餘年前のことである。

久米の押領使、漆の時國、その妻秦氏は子の無いのを歎いてをつたが、これは神佛にお祈り申して子をさづかるより外はないと、夫婦心を合せて祈願をこめてをつた。すると或る夜妻の秦氏が夢に剃刀を呑むと見て身ごもつた。父の時國が云ふのに、お前が孕めるものは定めし男子であつて、成人の後には一朝の戒師となる程の者に相違ないと。母の秦氏はもとより心柔和で、身に苦しみがなく堅く酒肉五辛を断つて三寶に歸依する心が深かつたので、それだけでも立派な子が生れる筈であつたのに、まして靈驗を感じ

てはらんだのであつたからまことに時國の申すやうな子が生るべきであつたらう。

遂ひに長承二年四月七日、釋尊御降誕の日の前日、午の正中に秦氏は憫むことなくして男の子を生んだ。その時奇瑞が現はれた。即ち紫雲天にそびえ、邸内西の方にあつた丈の高い椽の木に白幡が二重飛んで来て、その梢に懸つた。また鈴の音が天に響き、いろ／＼の光りが日に輝いたが、七日経つと天にのぼつて了つた。見るもの聞く人不思議の思ひをなさないものはなかつた。その木を兩幡の椽の木と名づけた。久米の南條稻岡庄がその御誕生の地であつて、今にある岡山縣の誕生寺がそれである。

面白い句で、飯味すれば、飯味する程面白い、深い滋味が出て來ます。これを暇のある時、暇のある時、思ひ出してはよく味つて見て御覽下さい。これから先きは恰度春の時候で霞の立つ時だからい、でせう——霞はコチラから、遠方から眺めてみると、よく見えてゐるが、だん／＼近寄つて、中へ歩み込んで行くと、ちつとも見えなくなる。だん／＼先きの方へ逃げて行く——恰度、宗教といふ奴も、此の霞のやうに依體のわからぬ怪者ですよ。油斷はならぬ奴です。だん／＼近寄れば近寄る程、わからなくなる……ハッハッハ……これだけを云つて置きます。



偉人の
信仰

山下現有上人に木履を捧ぐ

憲政の巨人伊藤博文公

元山下法主常侍

薄 淨 光 師 談

は今も目に見る様に思ひ出されます」

日清戦役終り、日露の風雲をほらむ國事多

難の折、而も押しも押されもせぬ政界の巨人が、自ら増上寺の堂内の法苑に参内し、一家を指揮してゐる姿を想像するだに、當時の盛儀が偲ばれ、同時に又佛教界の威嚴燦たる氣勢に思ひ半ばに過るものがある。

「明治二十九年の二月十九日に伊藤公の父君重藏氏が亡くなられ、その御葬儀の導師は、野上運海大僧正でした。そして同三十一年の三周忌の時は野上大僧正は知恩院に御轉職になり、新に山下現有僧正が増上寺法主となられてゐました。其の頃私は法主臺下の常侍として仕へてをりましたので、その當時のこと

が今も目にうかんで見えます。

當時の増上寺、と言ふよりは一般信仰界の氣風は實に嚴然たるもので、従つて増上寺其他本山に對する上様の態度、それに上様に對する吾々の態度も、實に隔世の感を覺えるほどです。色々尊い想ひ出もありますけれど、萬感交々胸に迫る思ひで、とりとめもありませんが、唯、私は、公の親孝行の御心や、祖先崇拜の御氣持の厚かつた事を深く肝に銘ぜられました。そして其の頃、公等の寺方に對する丁重な御態度、それに應ずる僧侶方の威嚴たる相等、今に比べて實に其の立派さが、慕はれてなりません。」

この話をきいた記者は早速増上寺へ當時の

憲法施かれて五十年今新議事堂に毅然と立つ憲政の三大巨人の隨一伊藤公の面目を慕ふ老僧がある。(寫眞は故山下現有上人)

つゝ薄上人は語る。

「伊藤公の父君重藏氏の亡くなられたのは、たしか明治二十九年と記憶してゐます。伊藤家はもとく芝増上寺の檀家で、當時増上寺で行はれた葬儀や法要は、實に立派なものでした。而も公府家總出で、おいでになり、公御自身お客の御接待など、直々になさるお姿

記録を調査に出かけたが、書庫は唯今解放されてゐないので、詳しく知るよしもなかつたが、大殿の伊藤家過去帳の中に鑽る法名がなつかしまれた。

明治二十九年
典徳院殿顯譽誠毅善實大居士二月十九日
明治三十六年
周徳院殿芳譽貞溫清琴大姉十月七日
明治四十二年
文忠院殿博譽古林春畝大居士十月二十六日
と列記されてある。前二法名は勿論博文公の御兩親であり文忠院殿は、

明治四十二年十月二十六日
日ハルビン驛頭に於て日

韓併合の犠牲となられた巨
人伊藤博文公その人である。



「三十一年の重蔵氏三回忌大法要の盛儀には
東京支校（東京普通宗學院の前身）の生徒五
十人を選抜して、白衣、裙袴のいでたちで給
仕したものでした。

伊藤公自身も其の席で、酒肴の御接待をな
なされてゐました。

其の時食べた焼松露など、とても美味かつ
たですよ」

好物の酒肴にその松露が、どんなにうまかつた事か、薄老の顔が瞬間うれしさうにほころんだ。

「それやこれやとその時の有様は一寸今こゝで言ひ表はせないほど殷盛なものでした。その法事の時でした。私の終世忘れえない、そして伊藤公には實に氣高い而も信仰心の強い立

派な風格がある事を

沁々と味つたのは。と言ふ

のは、丁度法要が勤まると言ふ時、山下僧正

が大殿におでましにならうとした時、御草履

が、そこになかつたのです。さうしたらどう

です、伊藤公自身がそのお履物を手づから持

つて来て大僧正の前に揃へたではありません

か。常侍の者たちは冷汗ものでした。僧正も

いたく感激された事でせうが、公の至極平民的なのに常侍たちは終世の教訓として、大人物の倅をしのんで、今も忘れられません。

憲法發布五十週年の今日、議事堂前に厳然と構へてゐる公の銅像、今新たに堂内に建設

された公の像、ともに永遠に傳はる事でせうが、實に公の信念人格が永遠不滅である所以もこゝにあると思ひます。」（寫眞は伊藤公銅像）

薄老の話は未だく續くのであつ

た。公の佛教に對する隠れたる歸依は其他諸々に傳はつてゐるのである

が、名高い支那蘇州の寒山寺に「楓

橋夜泊」に告げる夜半の鐘聲として

親しまれる平和の鐘にきざめる鐘銘

こそ伊藤博文公撰とある。

荒廢した寒山寺の復興も實は伊藤公の盡力

によつてなされたものであると知つてみれば、今日支那にあつて世界の平和運動に身命

を捧げてゐる我將士も伊藤公によつてなされ

た寒山寺の鐘に親しんでゐる事であらう。



國民使節の使命

支那事變が勃發して以來、支那の逆宣傳のうまさや、日本の宣傳下手等によつて、事變發生の正しい原因や、日本それ自身の認識について海外の人々は正しい理解を持たない様であつた。

今回の事變を契機として生じた諸外國との關係について、政府當局としても外交方面に一方ならぬ苦心がなされてゐるが、民間に於ても亦正しい日本の理解、認識を深めさせる爲に大いに努力したのである。

所謂國民使節は諸外國の日本認識の状態を觀察し、諸外國に日本を正當に理解せしめる

新興ドイツを語る

國民使節

坂戸智海

目的と使命を有してゐた譯である。

私たち、中野正剛氏、酒井榮藏氏等一行十四名は十一月十二日神戸を發つて歐洲に出發して伊、佛、獨、英、米の諸國を約四ヶ月間に亘つて視察し、親善の使命を果たして來たのであるが、英、米、佛に對しては殊更語る事はない。佛は政變によつて國內の統一が急務であつて直接に日本に關心を持ち得ない程度であり、米國も現在直接の刺戟のない限りは日本に對して靜觀の態度を持してゐる様である。英國は日支事變に於ける日本の正義と言ふ事は充分に知りつゝも、利害關係に於て支那を支持してゐる様な状態であつたので、認識の是正と言ふよりはむしろつとめて親善に力

をつくした譯であつた。然しそれら英、米、佛の三國については今多く語るべくもないが、伊太利、獨逸兩國、特に獨逸について大いに學び教へらるゝ所があり、日本として實に意を強うするものがあつた。

國民使節として以上の意義目的の他に、實は、當時毀譽極端に騒がしかつた日獨防共協定(日伊防共協定は渡歐の船中で知つた)についてその確實性、永遠性、内部的組織、等について明確なる認識をお互ひの國民に持たせようと言ふ大志を抱いてゐた譯である。

即ちナチスドイツ、ファッショイタリーと共に果して日本は歩調を揃へて行くべく期待を持ちうるかと言ふ危惧の念を一掃する爲で



もあり、協定にどの程度の信を置いていゝかを確かめたいと言ふ氣持もあつた。(寫眞は労働奉仕)

信頼しうる兩國

之を要するに、ナチス獨逸及びファッショ伊太利の兩政權、政策が永續するか否か、而も日本との提携に於て立派にその使命を果しうるかどうかの問題の解答を得べく出かけて行つたのであるが、その解答は實に次の如く信頼しうる兩國の眞相を把握しえたのである。

即ち兩政權は永續しうる。萬一黨首ヒットラー、ムッソリーニ兩氏が斃れる様な事があつても頭として動ぜぬ兩國の基礎が出来てゐる事、又防共協定に對する兩國の身の入れ方、心の打ち込み方はともに眞劍であり熱情に燃え、却つて

現在までの我國及び國民の之に對する態度、が兩國に對して申譯ない位である。

兩政權の政策機構は互に相通する所があり同傾向にある様であるからこゝではドイツを主として少しく語つてみよう。

青年ドイツ

イタリーも同様であるが、特にドイツに於て目につくのは、日本の明治維新を憶はせる當路要人の若い事であり、そしてそれらの人が皆或一つの目標に向つて激烈、眞劍に働いてゐる事である。

お互ひに働く青年等が、仕事に自信を持つてゐるから明朗で解放的であつて、ロシアの様な秘密主義を取らない。

諸汎の設備、施設についても其の根本觀念を確立して不動の信念にもとづいてゐるから不安がない。

青年ドイツの姿を先づ一例で示せば、ナチス要人の年齢は黨首ヒットラー總統の五十歳を始め、ゲーリング副總統の四十五歳、外交

部長ローゼンベルクの三十八歳、親衛隊長にして全ドイツ警視長監ヒムラーの三十八歳、更に内閣総長ポレー氏など實に三十三歳の若者である。而も之ら青年要人はすべて名もない勞働者無産の大衆の中から、拔擢された優秀者揃ひである事も日本の明治維新を髣髴せしめる。

訓練道場

ベルリン郊外ダーレムに黨の外交指導部經營のシュールングスハウス（訓練道場ともいふべきもの）がある。

それは大學専門學校の卒業生の中から外交官、商務官等海外へ出て勤務する者の爲に、試験を行ひ合格した者を採用して人格手腕を訓練する所である。選ばれた二十五人乃至四十人の青年等は六ヶ月間獨自の精神を以て人格的にたゞき上げられ、修養させられる。

勿論全部寄宿で宿舍は新しくモダンではあるが設備は至つて簡素で、そこに於てなさる團體生活は實に徹底してゐる。即ちナチス

ドイツの他の方面、一般勞働、青年團、刑務所等と同様に指導形態は、校長をコンマンダント即ち指令官と呼ぶ如くすべて軍隊的である。

つまり學問偏重の弊風を脱して實際有用の材を作り、第一線に補給する様になつてを

愉快な事に、之も亦青年ドイツにふさはしくコンマンダントは實に立派な人格をもつ適材で相當な年輩かと思はれたが、聞いてみた所三十歳との事であつた。

而も學歷は中等工業學校出の、所謂村の技手程度のものであるが、各所に轉々としてあらゆる辛酸をなめた所の黨の功勞者である所から拔擢されたのであつた。

勞働奉仕

之らナチスの青年要人は勿論黨の功勞者であるが、單に椅子の振り當によつてその職にあるのではなく、いづれも、それに對する充分の知能、力腕の所有者で、生々の意氣に燃

え、各部署に對して全責任を負つて働いてゐるから輕もしい限りである。

現在これら人材を養成し、人材を教育してゐるドイツの人材養成登用の方法についてみなければならぬ。

つまり、ドイツの如き概念的、理論的の國と言はれてゐたものが、生きた人間、實際の人間を作り、現實に即した教育をしてゐる事である。それは、上述の訓練所のみでなくあらゆる男女高等學校卒業生にして、大學入學志願の者には例外なしに所謂勞働奉仕として六ヶ月の勞苦に服させるのである。其他青年團指導等、すべて將來實際に役立つ人間、働きる人物の養成につとめてゐるのである。

ナチスと言ふ黨名は、詳しく言へば國家社會主義的ドイツ勞働黨と言ふのであるが、その名のみでは吾人ドイツ國情にうとい者は社會主義的であり勞働と言ふ意味に於て、勞農ロシアなどの勞働などと關係ある様に考へ易いが、事實は全然違ふのである。

社會主義と言ふも國家社會主義であり、同

黨發生迄政權を握つてゐた社會民主主義等と比べると天地の差がある。同じく労働と言ふも其の意味内容に於て全く正反對である。

歡喜の労働

在來の唯物史觀者流の考へる労働とは色々條件から一種の壓迫、強制等によつて労働者が嫌々ながら働き生産してゆく事になるのであるが、ナチスドイツの労働とは喜びを徹して而も誇を持つて労働へ！ 労働の光榮を認識してゐるのである。

労働生産は經濟生活の根柢として誰もが喜び、勇んでやるべきものと自覺してゐる。所謂固定し、萎靡沈滞した陰慘なものでなく明朗な歡喜と感激に充ちたものでなければならぬと知つてゐる。

已に労働がかくあるべきものであるならば彼らの働く工場も又明朗であり愉快のものにせよと言ひ、彼らの住む住宅は太陽のなき街であつてはならぬ。極めて安易明朗でなければならぬ。

又彼らの交る環境、社會も之にふさはしきものであるべきであり、従つて労働能率は彼らの自發力によつて當然擧つて來るのである。言ひ換へれば、ソビエツトの唯物的労働の方針に對して之は唯心的な労働の仕方とも言ふべきである。

日本精神とドイツ精神

結局する所、ナチスもフアーションも、決してその宣傳されてゐる様な極端な政策が全部であるのではなくして更に全體的な遠大な計畫施設を以て行つてをり、人事政策又前述の如くであつてみれば、多少の政變位や外部の壓迫で動搖するとは考へられない。

又防共協定についても今後獨逸、伊太利兩黨首が先達となつて日本の認識、理解につとめて實に熱心である。

就中感激した事はヒムラー警視長監は某獨逸人の著した「サムライ」なるパンフレットを自分の麾下の親衛隊將校に分配して教科書に準ずるものとして讀ましめてゐる事である。

る。

「サムライ」の内容は勿論日本武士道を道義的になしに實例に即して編纂したもので、樞公の忠節や、維新の元勳などで、就中滿洲事變の日本出動將士の話、たとへば「金澤少尉召集令狀を受け取る、其妻に大命を告ぐれば其妻、仕度は出來たり、軍人の妻として覺悟はもとよりと夫を勵ませり」とか「〇〇上等兵は妻子家族ある身なれば、後方勤務を命ずとの上官の命に對し、〇〇上等兵は一死奉公私情を捨てをる故まげて第一線に驛ひ度しと申し出づ、許されざりき、一夜明くれば、〇〇上等兵に第一線出動命令下れり」などと言ふ様な簡略にして而も日本出動將士の至誠奉公の訓話を擧げ、ドイツ魂と一致せる忠節無比而も情味あふるゝ大和魂の發露としてドイツ人の感動を呼び起し、親日崇日の氣風をいやが上にも強調してゐる有様である。かくて實際的にも精神的にも日獨兩國の結びは固き磐石の上にある事を確めえた。(筆者は大正大學教授)

掏摸に逢つた話

木谷新八

大羽比羅夫畫



落語の「粗忽長屋」を地で行くやうなあわて者は菊村君だ。彼は自ら「粗忽」の悟道に入つてゐると稱してゐる程だから、自己の粗忽に對する一切の非難に超然としてゐる。匡正しようとしなから、そのそゝつかしさは

愈々精彩をはなつて來て、自ら一種の風格をなしてゐる。菊村君は或る日、會社の歸りに省線のS驛で定期券を買つてゐた。買ひ終へてその場を立去らうとすると、足元に一本の洋傘が倒れ

てゐた。彼はそれを拾ひ上げたが、彼の外には誰もその場に居合さなかつたので、これはてつきり前に切符を買つてゐた者が忘れて行つたに違ひない。これはあわて者だ、世の中には頼もしい同類がをるわい、あわて者の道伴れがあるとは嬉しいことだ。と、同病相憐れむと云ふか、あわて者を以て自ら任ずる彼が、他人の粗忽の證據を手に握つて、いささか良い氣持になつて、その洋傘をわざ／＼驛員のところまで持つて行つた。「傘が落ちていたよ」と朗らかな聲で屈けてやつた。何時も粗忽の故を以つて非難の雨を浴びてゐる常人には、自分はこの通りに落付いて、他人の落し物を屈けてやる程の餘裕があると云ふところを他人に示したゞけでも嬉しかつたらしいのである。

菊村は上氣嫌で家に歸つた。服を着かへてゐる時に、細君が「貴方洋傘は？」と訊いた。——はて俺は今朝傘を持つて出たかな、と反省してゐる中に、細君が「また、お忘れになつたんでせう？」と疊みかけて來た。——そ

う云へば持つて出たやうである。あッ、持つて出た。今朝は雨が降つてゐたから——そして退社する時に給仕めが「菊村さん、傘をお忘れにならないやうに」と云ひながら、

他の顔を見てニヤリと嗤つた。そこで俺は故意と悠然と傘をとつて、小腕に抱へこんで歸つて來た。

驛で降りたまでは確かに傘を抱へこんでゐたらしい。明日からの定期を買はなければならぬのと思ひ出して、あすこで三ヶ月の定期券を買つてと、……此處まで考へて來ると、彼の顔色がさツと變つた。しま

つたッ！ ありや俺の傘だッ！ 他人が忘れたものと思つて、御丁寧に驛員に届けてやつたのは——

細君は彼からその話を聞いて、何とも云へない情無い顔をした。「貴方があの傘を取返して來る譯には行かないでせうか

ら、妾が取つて來てあげますが——會社からお持ちになつて來た洋傘、まさか他の人の洋

傘ぢや御座いますまいね。」が、菊村君はそれには何とも返答が出來なかつた。もうすつかり自信を失くしてゐたも



のだから。或る日事務の都合で、歸りが少し遅くなつたので、會社の近所の食堂で飯をすませた。

一杯飲んで堪能し切つた顔付で煙草を食へて鼻うたまじりに、初春の宵闇の中を驛の方に歩いて行くと、

「すいませんが、一寸煙草の火を貸して呉れませんか？」

と一人の男が彼のうしろから煙草の火を求めて追ひ纏つて來た。菊村君は勿論快く貸してやつた。その上更に親切氣を出して、ポケットからマッチの箱を一つとり出して、「僕は他にもあるから、貴方に上げませう」と呉れてやつた。煙草吸ひが往來で煙草が吸ひ度なくなつて、マッチが無い時程情無いことは無い。そこで彼は煙草好きの心理を察して、マッチを呉れてやつた自分の氣の利いた親切に少しばかり良い氣持になつた。やがて驛のプラットホームに立つた菊村君は電車を待つ間の所在無さにチヨツキのポケットに手を突込んだ。時計を合せようと思つたのである。——が、無いッ！ 時計が無い。おやッ、確かに持つて來た筈だ

が、それとも家に忘れて来たのかな。いや、さつき事務所の机の上で、確かにこの指に鎖をからけて、弄んでゐたやうな記憶がある。すると机の上に置きつばなしにして来たのだらう。

彼はあわてゝ會社に引返した。歸り仕度をしてゐた給仕が、またおきまりの忘れ物だ、と云ふ様な薄笑ひを浮べて、「忘れものですかとつて来ませうか」と云つた。「いや」それに及ばないとばかりで、自分の机へ一目散に飛び付くと、その上を探し始めた。無い、矢張りない。机の抽出し、机の下果ては屑籠の中まで探したが、給仕は「さあ、氣が付きませんでしたね」と素氣ない返事をする。はてな、どうも先つき、確かにこの机の上で鎖を指に捲きつけて弄てあそんだ記憶があるんだが、それともあれは昨日のことだつたけかな、いや今日らしい。すると、チョツキのポケットにまた入れたに違ひない。その時突然彼の心臓が拳骨で殴られたやうにどきんとした。——あッ！ やられた。彼奴だ！

彼の顔は一時に眞青になつた。憤慨とも後悔ともつかない感情が一どきに爆發して、頭がくら／＼する位だ。——さうだ矢張り彼奴だ。先刻煙草の火を貸してやつた彼奴に違ひない。どうも様子が可怪かつた。わざ／＼あとから追ひかけるやうにして煙草の火を借りに來た。映畫なんかによくあるぢやないか。煙草の火なぞ借り乍ら、隙を見て、時計や財布を掏り取るなんて云ふ場面が。さうだ、矢張り彼奴だ。——どうも風體が良くなかつた。ゴルフパンツを穿いてジャンパーを着込んで、大工とも請負師とも人足とも付かないやうな格好をしてゐた。あゝ云ふ風體をしてゐる奴には掏摸が多いと云ふことを知合ひの巡査から聞いたことがある。ちエッ！ うまくやられた！ 確かに彼奴だ！ 畜生めッ。——彼は口惜しさでいよく青くなつた。その損害の全額を計算して益々憂鬱になつた。もう追掛けても間に合はない。彼は全く打挫かれたやうにがつくりして仕舞つた。——それなのに俺はなんと云ふお人好だらう。自分の時計

戦線 石油を飲む

從軍係 白崎 嚴 成

南京に行つた時のこと、兵の宿舎でストープをかこんで皆んなで手柄話などに打ち興じてをると、お客さんが來たからお茶でも入れて飲まうと云ふことになつた。さて、お茶の支度も出來て、飲み始めるとトタンに一人の兵士が、「これは臭い石油臭いぞツと！」妙な顔をして茶をほき出した。すると他の兵士たちも臭い／＼、石油臭いと騒ぎ出す。「どの薬罐の湯を入れたか？」「あの薬罐のだ」「えッ、ありや石油だ！」そりや大變だ、では皆んな石油を飲んだのだのだと云ふので大騒ぎ。早速軍醫をよんで診察して貰ふと、大した事はないが「皆んな石油を飲んだのだから、口から發火する危険があるから今日一日はストープの傍へ寄つてもいかんし、煙草を飲んでもいかん」石油を飲ん！だ兵隊さん達、これを眞に受けて、ストープから遠去つて、煙草も吸はずに濃い顔。

が拘られたのにも不拘、わざ／＼マツチを呉れてやつたりして……

彼は文字通りとぼ／＼と家路に就いた。電車の中で、同じやうなことを繰返し繰返し口の中でつぶやいた。——然し、如何に商賣

とは云ひながらうまいものだ。あゝなると神業だ。此方に何んの感覚も興へ

ずに煙草の火を借りてゐるほんの一瞬间に拘り取つてしまやがつた。かう云ふ風に受取つて煙草を出してや

つたのを、かう云ふ風に……は、

は、あの時に左手を働かしたのかな。然しうまいもんだ。——彼は

すつかり感心してしまつた。そして

直ぐにその後から、畜生めツ！ マツチを呉れてやる程人の好い人間の大事な時計を拘り

取るとは！ と、人前でなかつたら、地獄敷

を踏みたい程口惜しくなつた。彼はいよく

青くなり、いよく憂鬱になつた。あゝ、あれと同じ時計を買ふには一ヶ月分の月給を犠

牲にしなければならぬ……畜生めツ！

彼は家の門を潜るまで、同じ事を口の中で繰返し、憤慨し、感心し、憂鬱になつた。細君にも確に口を利かないで、茶の間に入ると長火鉢の前にベタンと座り込んだ。——困つた

ぞ、女房になん



と告白した

ものか。時計を拘ら

れたなぞと云つたら大事だぞ。弱つた。

しばし考へ込んだ彼が、ひよいツと目を舉

げると、その目の前の棚の上に、あれ程にも

彼の精神を消耗させ、打挫いだ處の件の時計が、ちやんと置いてあるではないか。白々とした光りをはなつて。

ちえツ！ 何んの事だ。彼は悲觀のどん底

から、歡喜の絶頂に飛上つた。やつぱり家へ

忘れてゐたのか。獨りで大聲を出して笑つ

た。細君は氣味悪さうに「一體どうしたの？」

とその顔をのぞき込んだ。彼は一部始終を打

開けた。そして獨りで「あゝ、良かった！

あゝ、よかった！」と叫び乍ら喜んでゐるの

だつた。「なあ、若しこれが本當に取られたん

だつたら大損害だからな。あゝよかったよ。

あゝよかった。」と幾度も幾度も、本當に窮地

から救ひ上げられた人間のやうに感激にみち

た聲を出して云ふのだつた。

細君はあきれ顔で「何がよかったんだか、

私にはさつぱり解らないわ。あんたつて、よ

つほど妙な人ね、自分獨りで勝手に悲觀した

り、喜んだりして騒いでゐるんですもの。」と

さも馬鹿々々し氣に、有頂天になつてゐる夫

の顔をしみ／＼と眺めた。(をはり)



お茶の行商人

吉水 辨道

杉村さんでは御子さんが無いので、御家庭が何となく淋しきうである。そのためなのだらう、いろいろの動物を飼つてゐる。

猫が四疋、犬も三疋、小鳥だの何だの、随分大變だと思はれる。然し杉村さんにして見ると、此の動物達が可愛い家族、いや子供達であるので、そのめんだうな御世話の中に亦いひ知れぬ楽しみもあるらしい。

其の猫の中に、一疋珍らしい純白な面も金銀の眼を持ったのがゐる。何でも、かねて杉村さんの動物好を知つてゐる若い御茶の行商人がつれて来たのだとのこと、――

其の話をきいて、私は別に珍らしい猫に興味は起らなかったが、只其の若い御茶の行商人の態度には少なからぬ好感を覺えた。

御茶の行商人――近くの町で最近開店し

た松本利助といふまだ二十歳そこゝの男なのだが、實によく人間が出来てゐるらしい。彼は御茶を賣りに來ても、其處の家に何か取り込み事でもあれば、頼まれもせぬのに一生懸命になつて手助けを始める。御茶のことなど全く心から忘れて了つてゐると見えて、用事がすめばこつそりそのまゝ御茶の茶の字

もいはずにかへつてゆく、そんなことをしてはお前商賣が成り立つまいが、といふものがある、いつも答へて、

「ナニ、私の商賣はアブラ七分に御茶三分なのサ、時にはまるゝアブラを賣つてもいいのサ、御客様さへよろこんで下されば又御茶も使つて下さるサ……」

平氣な顔をしてゐる。ある時などは、百姓の家の軒下へ行商の荷を下ろして、折から

たきつけられた掛風呂の火を燃して三時間も

手傳つて、皆が湯に入れるやうにしてからかへつたこともあるといふ。

杉村さんの猫にしてもさうである、六七里も遠方へわざゝ出かけていつて、而もお土産物まで持參、もつとも御手のもの、御茶ではあつたが、いろいろ手段方法のあげく、やつとのことで貰ひうけて、自分の懐に入れ

て杉村さんへ運んで來たものだ。もとより杉村さんは動物好きだ、此の松本利助の心から猫を可愛がる姿には、一も二もなく心を打たれて杉村さんは涙さへ浮べて彼の所から猫を受けとつたとのことである。

其の上當座は三日にあげず猫の様子を見にやつて來た。杉村さんでは、白(猫)の媒人さんといつて心から彼を迎へ、そしてほんとに嫁でも世話して貰つたやうな感じがして今日では行商人ではなく、何かから親戚にでもなつたやうな心地がするといつてゐられる。

「とても貴方、三日にあげずわざゝ猫の様子を心配して見に來るなんてことが、普通の

人に出来るものですか。」

さういつて、奥さんが第一に利助の親切に心から服して了つてゐられる。

事實、彼にはゆく先々が自分の親戚とでも思へるらしい、然ういふ不思議な一種特別の感受性を持つてゐるのかも知れない。

此の一見何でもないやうな、實は何でもないところではない、何人も容易に行へないことが、ふしぎに彼には萬事スラ／＼と行はれてゆく、だから、次第に世間が、御茶といへば利助さんの御茶、たとへ内に澤山あつても彼の顔を見るとどうしても買はねばすまない不可思議な一種の魅力にまけて了ふのを何としまやうもない。「貴方のところもさうか」「あなたのところもか」。

人々がさう打ちあけ合つて、然し別に悪い氣もしないらしく、アハ、と笑つて了ふのだ。

これまで、静岡あたりから、幾人もの御茶の行商人が入つてゐた、が一人減り二人減り今では全部利助さんに胃を抜いて了つた由、而もうれしいことには、誰一人商賣上の敵愾心を抱いたものはなく、皆笑つて、ど

うも君にあつちやかなはないよ、と引き下つたといつてゐる。

私は、きけばきく程彼の爲人が慕はしいので、是非一度彼にあつて見たいので、杉村さんに御願して紹介して貰つた。

彼にあつて見ると、想像とは些し違つて、全體の小柄な、顔などもどこか氣六ヶ敷げなヒネコビた感じのする男だ、此の男がどうしてそんな、と思はれるやうにも感じた。

然しいろ／＼話して見ると、並々ならぬ彼の考へには、流石に敬服せざるを得なかつた。彼は百姓の生れとのこと、

「百姓が野菜を作る秘訣は肥料です、イエ肥料を以て先づ肥沃な畑を作ることです、肥料は畑をこやすためだのに、皆か只眼の先の野菜物に向けてのみ肥料を使用するから失敗するんです。私らの商賣も同じことです、儲けさせて貰ふ御得意を作ることです、御得意が畑です、御茶の行商なんて商賣は老人になつてからでも出来ることで、それまでは畑を肥沃にすることが大切ですよ……」

好漢いみじくも道破せるかな、人生のこと

眞に然り、よい畑によい野菜は生じ、よい家庭によい人は生る、信田を耕さずんば信仰の種もはえまじ、荒蕪の地に施される肥料は徒らに雜草を繁らすに役立つのみ。此の見や

すい自然の道理も一向に人にかへり見られず又行はれない、さういつて力説する彼の態度には、さすがに敬虔にみちあふれてゐた。

「杉村さん、あなたがよくいふ、日本精神の具現者……」「さう／＼、全く……」

「皇運を扶翼する、といふ具體的事實以外に日本精神はない、といふあなたのいはゆる活きた實例が此處にも現れたわけですよ」

「いや實際さうですよ、あの男のやうにゆけば、最初から車がレールに乗てゐるやうなもので、脱線しない限り間違はないですよ」

「——つまり、日本精神の發展が天地無窮である所以といふわけですよ、あゝ、一介の御茶の行商人、其の男の心がけとやり方とで、暗いところが明るくなつてゆくやうにさへ思はれる、——考へさせられますネ……」

折から、何といふ名の小鳥か、杉村さんの居間の方で急に高ねをあげて囀り出した。

婦人と家庭の浄土

ス・フと育兒の問題

山潮由起子

「ス・フ混用のさらしは赤ちゃんの皮膚に悪いって、本當としたら大問題だわ、今の中にうんと買ひためて置き度いと思ふんですけれど」と、知人の身重の奥さんが全く大問題に直面してゐるやうな顔付で相談された。

これは、目下日本が直面してゐる全般の状況から見れば、ほんのさういふ問題の様に思へるけれども、身を以つて事に當らなければならぬ可愛い、大事な子を持つ奥さん方には、大問

題に違ひない。それに社會的問題としても、國民保健と云ふ観点からしてゆるがせには出来ないので。これにはどう答へたら良いのでせうか。

買ひ溜めはいかぬとなればどうでもス・フ混用の木綿を使はねばならぬ。國家の經濟と云ふ高所から見ても、赤ちゃんの皮膚のためだけにス・フ混用を特別に購置することが不可能とすれば、これを補ふ何らかの手段がとられなければならない。それはたゞ、ス・フでは駄目

讀者の皆様へ

一、女性評論（一千字以内）
二、信託家庭電話（同上）

右の通り募集します掲載の分は薄謝呈します。

怒りを抑へた珠數

一 讀者

夕方、とても電車が込んで押しつぶされつ、あちこちで悲鳴さへ聞える程でした。

「もう少し中の方へ吊皮をお持ち變へ願ひます」と言ふ車掌の言葉も癪にさはる程でした。と、急に横から荒々しく押し分けて來た若い男の泥靴で私の新しい、白足袋はめちや／＼にきれてしまひました。口惜しいやら腹立たしきで、胸が塞つてしまひました。じつとみつめた私の顔はどんなに凄かつたでせう。もう少しで、人前も忘れて荒い抗議をする所でした。とたん、吊皮にかゝつてゐた一輪の珠數が、私の心を抑へるかの様にしつとりと輝いてゐました。洗へばなほ足袋、込み合ひはお互ひの事、そんな些細な事でと、珠數を靜かになでました。

信 仰 の 道

美容大學院主

橋本樂榮さん

信仰を得た法悦の境地こそ人生最大のよろこびであらうが、大聖釋尊さへも嚴上六ヶ年の修業をなされたほど信仰への道は苦難荆棘の道ではある。

芝山内安養院の千葉寛定師の紹介で、法然上人信仰會の中村辨康先生に信仰指導を得る様になつてからの橋本さんの顔色はにこやかに輝いてゐるのである。

十五年間病床生活の夫の看護病を全うして、半年前に黄泉に送つた樂榮夫人の顔には淋しみを徹し、憫みを越えた清淨の輝きが見える。

「主人は別に信仰と言ふほどのものは持ちませんでした、何の屈托もなしに十五年の病床生活

を終へて死んで行きましたが、何もかも私を信じ、私に頼み切つた笑顔で死んで行きました。其の確信に充ちた夫の心を私は尊

いものと思ひます。本當に私を信じ何ら子供に遺言もなしに私をたより切つて死んで行つた事を私は妻の本懐と思つてゐます」



「しかし夫の信頼を一身に負つて、自信を持つてゐた私でしたけれど、やはり夫と別れてみると淋しきと言ふよりは頼りない、弱い心が、合ひ間／＼に心の隙をのぞくのをどうする事も出来ませんでした

た。これではいけない私はもつと正しい、深い信念が必要であると心にもがきました。仕事に精魂を注ぎ、母としての生活に努力しながらも、それを完全に果しえな

い爲に、日蓮や、蘇蘇や、人の道、その他色々宗教にすがつて見ましたけれど、どうしても自分を信仰法悦の道に導いてくれるものはありませんでした。

橋本樂榮女史
分らぬながらも、之は死者よりはむしろ生きてゐる人の爲に教へられたものだと言ふ風に考へてゐましたので最近しんみりと讀み直してみました。然し充分の理解がゆきませんので、誰か本當に信仰的に頼れる人をと探してゐたので

す。そんな事から、たゞ何も理解する必要なしに、御佛の心にすがりうる人々の心がうらやましくてなりませんでした。最近中村先生の懇切な御指導によつて、どうか佛の御手に、何の不安もなくしにおすがり出来る様になつた事を大へんよろこばしく思ひます。私のこのよろこびの心境や態度を、上海の戦線にゐる二人の子供たちが知つたらどんなに驚く事とせう」樂榮夫人はさすがによりこばしきうであつた。病身の夫と、いたいいけな子供たちを抱いて、この立派な美容院をきづき上げて来た女丈夫の並々ならぬ苦心の跡がうかがはれて頼もしい。「今では家人たちに何ら小言を言はなくてすむ様になりました。以前の家風と、現在とを比べて、それは皆私の心の反映、佛の慈悲心の反映であると覺る時、自分の過去が恥しい様な氣にもなります」と敬虔に語り續けた。



妙好人瓜生岩子女史

信仰の生涯

大正大學教授

佐 山 學 順

「佛教會津」それは現代の會津にはふさはしく無い言葉のやうだが、歴史的には肯定されてよいと思ふ。會津地方には國寶に指定されたる佛像或は保護建造物も澤山ある。しかも若松市には各宗を通じて百餘の寺院があるのは往時の盛んな有様を物語るものであらう。その會津佛教の傳統的信仰を如實に表はしたものは大乘佛教の篤信者にして體験者たりし瓜生岩子女史である。

岩子女史一代の善行は國定教科書に録されて居るが、その一生を通じて誠に勞苦の人であつた。殊に其晩生は人の爲に世の爲めに苦勞され、眞に他の苦痛を一身に引受けるといふ信念の下に奉仕せられた事である。女史

幼にして天災厄難に苦しみ、嫁して夫の病に悩まされ會津戰禍の苦勞より教育、慈善、矯風、貧窮人、棄兒孤兒の救済、戰時の奉公は勿論、勤儉産業の興隆等々凡ゆる社會事業の先覺者であり一生を苦勞に通された人である。

女史の生涯は全く信仰そのものである。歳十四にして熱鹽より城下若松に移つて叔父山内春曉に身を托した。山内氏は熱心な佛教の信者であつた。岩子女史一代の善行は此の信仰的家庭の感化である、十七歳にして佐瀬茂助氏に嫁し吳服商の内儀として一男三女をもうけたが夫の大病、雇人の不始末、叔父の急死、等々相次ぐ厄難に遂に店をたゞんで吳服の行商を續けること前後七ヶ年病夫を看護し

つゝ四人の子を育てる苦心はどんなであつたらう。夫をあの世に送り四人の子を養育して母の大事を果した時、會津戰争が起つた。時恰も郷里にあつた岩子女史は會津落城の婦女子の悲慘を目撃して、自ら先に立つて私財を投じ食物を配り、夜具衣類は元より藥を煎じ老を慰め幼を養ひ、旦夕身を忘れて奔走した。これより女史の身心を擲けて社會に奉仕する尊い生涯が始められたのである。

女史の生活は常に神佛に禮し貧乏と勞働の一生と無我奉仕の朝夕「佛の岩子」と呼ばれて居つた。明治七八年頃戰後の疲弊に人心荒廢して加ふるに廢佛毀釋の影響をうけて佛や先祖を粗末にするを嘆き、社會の教化は佛法興隆に如くはなしと、自ら、地方寺院僧侶を説いて法要を盛にして授戒を開き、眞の佛道を民衆に布演するに苦心した。自ら奔走して寺院住職を集めて協議した時、岩子女史は決然として「吾等親子發起と相成る上は如何に損耗ありまして皆お引受けいたします。そして隨喜の僧には足袋代も差上げます。たと

ひ吾等家産賣り抛ひ盡してもなほ不足の時は母子共に年期奉公に身を任せても貴僧方には御迷惑をかけません」と。何といふ尊い信念と傳道精神であらう。女史の眞心に促がされて墮眠の僧を覺醒して教化の任を果したのである。

岩子女史の奉仕生活は一村一町を以て足れりとせず、廣く縣民に呼びかける爲めに縣廳所在福島市に出で、長樂寺の裏長屋を本據として、女史の第二段の奉仕が酬せられたのである。一錢貯蓄の奨励、勸懲道の布演、貧民救済、労働者保護、植民事業、出獄人保護、孤兒園の設立、給製造の改良、給糧の菓子發明、廢物利用等々寧日なき奉仕勤勞の生活であつた。其爲めに役人を説き富豪に勧め、所謂社會事業の興隆に専心した。更に縣より全國的に呼びかける第三段の奉仕が企てられた。時の警視總監三島通庸の後援を得、東京名流富豪訪問の際次ぎのやうな記事がある。

髪は半白の茶筌髷、油をつけず、藥にて乾ね洗ひ晒しの太機布子、黒き毛鷄子の片幅帯

大きな風呂敷を肩に、手には籠、後ぎれの草履ばき、勝手口より案内を乞ひ縁の邊にうづくまつて、口をもきけぬ謙遜の姿、然し人と國の爲めといふ時には決然として面をあげ吃と顔を見つめて諄々として説き去り説り來たる、東北なまりの素采の風采、然しきく人は



(瓜 生 岩 子 女 史 現 存 唯 一 の 寫 眞)

感心して耳を傾ける」と、濟世利民の爲めには千里を遠しとせず、貧民救助の爲めには千萬人と雖我ゆかんの氣概である。

第一回帝國議會に社會慈善事業獎勵案の請願書提出、磐梯山噴火犠死者の追弔法會、東京養育院の幼童世話係長、會津育兒會の設立

産業研究所、福島育兒園、濟世病院の創設、日清戰爭中戦死者遺族三千餘名に慰問品の配布、東北三陸海濱の救済等々其功績や偉大なるものがある。

實にや宮中に召され皇后陛下御嘉賞に預り、我國女子として初めての光榮藍綬褒章を授與されたのも偶然ではない。

明治三十年一月仙臺に趣き歸途心臓を病み四月十九日六十九歳を一期として念珠合掌の中に正念往生を遂げられた。死の二日前辭世の歌に、「老の身のながからざりし命をも助けたまへる慈悲の深さよ」と皇恩佛恩を感泣しつつ終焉を告げたのである。

三十有餘年終始一貫己れに薄うして人に厚く社會奉仕に身心を捧げ、國家奉公、濟世利民の爲めに全心全力を傾注したるは眞に大乘佛教信者の妙好であり、日本婦人の典型である。淺草觀音傍らの銅像を拜するものその温懽慈容に感激せざるものなきは蓋し當然と語ふべきである。



徳川初期に入明を企てた

袋 中 上 人

浄土宗
教學部長

江 藤 澂 英

檀 王 さん

山紫水明の宗教都市、京都のまん中三條大橋の東畔に、東山の翠巒を背景に、鴨川の清流に臨んで、大銀杏樹の間に巍然として聳え立て巨刹は、「檀王さん」の通稱で都人に膾炙されてゐる。景氣の守護主夜神尊と朝市で有名であるが、この寺は朝陽山旃檀王院法林寺と稱し、七百年の往昔浄土宗の派祖望西樓了惠上人の開創にかゝるが、中興開山こそは徳川初期に出た、浄土宗隨一の學德僧である袋中上人である。上人滅後恰も本年は三百年に相當するので、同寺では四月一日から五日間如法な別時淨業會が修せられ、千僧供養を營

み、上人の鑽仰報恩と、事變戰死者の慰靈法要が行はれる。上人八十八年の生涯は學に教に、げに涙ぐましくも尊いものがある。

上人の幼時と修學

上人は奥州（福島縣）岩城郡の人で、父は賀氏、母は幡氏で天文二年正月の生れで、幼名は徳壽丸と稱した。日本各地を求道行脚し安藝の嚴島に光明院を創建した、大徳以八上人の弟である。兩親共に佛教の篤信者で、上人は虚空藏菩薩の申し子だと云はれてゐる。七歳の時、叔父に當る同國能滿寺の存洞和尚の許に入つて就學した。五歳にして千字文を讀じ、六歳にして五經を誦したといふが、

稀に見る英才で、九歳の頃には浄土宗正依の經典を初め、多くの經論祖釋を誦誦して存洞師を驚歎せしめた。永祿八年十四歳の春剃髮染衣して名を袋中と改めた。存洞師が試みに「袋中とは其意如何」と問ふや、「錐袋を脱するの意歟」と即答したといふが、げに「賢士の世に處する錐の囊中に存する如く未必ず露る」の謂に洩れず、上人の一生は行蹟寔に顯露なるものがある。上人は郷國矢目の如來寺、大澤圓通寺など當時の叢林に入つて研鑽、二十五歳の春には江戸に出で増上寺に掛錫して浄土宗學を究め、傍ら野州足利學校の講席に參じて禪儒の祕籍を閱讀するなど只管智能を啓發した。



郷里の教化

上人の鋭鋒はすでに囊中のものでなく、淨土宗學は名越鐵西兩流を究盡し、内外の學解も成満したが、尙も東西に名匠を訪ひ求法研學を怠らなかつた。偶々故郷猶葉の成徳寺より入山の懇請があつたので、孝心深き上人は喜んで同時十三世の住持となつた。時に二十九歳、全く兩親に水菽の孝をつくし、併せて厭欣を勧めんがためであつた。爾來二十餘年上人は日夜郷里を中心に教化し、また孜々として研鑽究學幾多の著述が大成されてゐる。

慶長四年上人四十八歳の春には岩城の太守深く上人に歸依し、城内に念佛の道場を建立し、上人を招じて開山と仰いだ。今の平町菩提院はこれである。

上人の渡琉

上人は夙に入明の壮志を抱きその機縁の淳熟を待つてゐた。或時兄の以八上人にこれを打あけ、本邦未渡の經論請來を告げたところ、以八上人は日本既傳の藏經さへ通覽せずして、入明などとは鳴計の沙汰だと嚴誡されたので、上人は以來藏經閱覽に精進したが、入

明の志望止みがたく、遂に慶長八年五十二歳郷里を後に西下九州に向ひ、専ら渡航の便を求めたが鎖國令の發せられんとする當時にあつては、一布衣の野僧が孤錫單身その目的は容易に達成すべくもなかつた。上人は遂に便航を琉球に求めた。その頃唐船の來着は筑前の博多、肥前の五島、平戸、長崎、薩摩の阿久根の五港に限られてゐたが、上人の渡琉はその昔唐船集や琉球神道記に依ると、往復共に平戸からされたいらしい。多年の念願であつた入明求法を達せんと、琉球に渡つた上人は、滞琉三年その機會を窺うたが雄圖空しく成らず、慶長十一年四十五歳再び肥前平戸に歸つて來た。

琉球の教化

滞琉三年上人は只すら淨業と教化に精進しその遺徳は今に尙甚大なものがある。琉球國王尚寧王は深く上人の學德に敬服し、桂林寺を建立して上人のために具さに四事の供養を捧げた。現在那覇市縣立病院の一隅はその遺

跡で、袋中上人行化碑が建つてゐる。尙寧王が上人への歸依渴仰は、檀王法林寺の所蔵にかゝる淨土宗寶尙寧王自畫贊袋中上人肖像に躍如たるものがある、絹本淡彩二尺の大幅で、眞摯な彩管が運ばれ長い賛文には切々たる眞情が溢れてゐる。この肖像はその贊の「辛亥春三月」から推量すると、慶長十六年らしいが、慶長十四年島津氏に征伐せられた尙寧王は、島津家久のために捕はれの身となり、薩摩に連行され、翌十五年家久に伴はれて東上し、大阪、伏見を経て八月駿府に至り家康に謁し、更に江戸に出で將軍秀忠に謁し、將軍家の饗應をうけ、歸途は木曾路から京洛を過ぎ薩摩に歸つてゐる。この往還に於て尙寧王は先に親しく教化をうけた袋中上人に面接をして、この自畫贊の肖像を贈つたものと想像される。兎も角上人滞琉三年間の行績は、廻り國王の歸依、民衆の教化に止まらず、兒童の教育、産業の振興、琉球に於ける風土宗教の著述等輝かしいものがある。中にも三百年後の今に上人弘布の念佛が嚴存してゐる。

「小祿淨土」として小祿村に残つてゐる沖繩の淨土宗は上人の遺徳を偲ぶに足るものである。私は昨春琉球に行き那覇市垣の花町檀王別院袋中寺の落慶式に参列の暇、小祿淨土の念佛者なる老人の古典的な念佛を聞いて、曾て南洋サイパンで見聞した琉球人の念佛信仰と思ひ合せて袋中上人の生ける教化に胸が打たれたのであつた。甘藷、砂糖、紡織等琉球に於ける重要な産業の開發者である、琉球の先覺者儀間眞常公こそは、上人の篤信者で上人から親しく指導教化をうけた第一人者で、その子孫たる那覇市住吉町の又吉眞溫の家に今尙上人眞筆の名號を初め多くの遺物も保存されてゐる。

琉球神道記

上人はげに博學多才で三十歳の著にかゝる梵漢對映集を二巻を初め、その著述に巻冊をなすもの凡そ半百を數へ得るが、就中「琉球神道記五卷」は「琉球往來一卷」と共に、琉球に關する特異なものである。神道記は滞琉

中國土黃冠の馬幸明の請に依て記述したもので、第三卷は主として印度支那のことを記し、第四卷以後は琉球の佛寺に關することを記してゐる。琉球の宗教や土俗を知る貴重な資料で、上人自筆本は京都東山袋中庵に藏してゐるが、最近明治聖德記念學會では記要別冊として刊行し、また學術振興會の後援で横山重氏に依て、琉球神道記袋中上人全集が出版されてゐる。琉球往來は稀觀本で東大、東北帝大等二三の圖書館に藏されてゐるが、本書も神道記と同じく馬幸明の請に依て作られたもので、當時の琉球行事を記す庶民教化の往來物である。年頭祝詞、連歌、鞠、華道、香道、茶道、圍碁等より職官、諸社寺の有様などを網羅してゐる。これまた日本文化の南進や、支那文明の渡琉影響などを知る上に貴い文獻である。

京洛近畿の教化

入明の志望を止めて上人は琉球島民の惜別を後に、慶長十一年五十五歳肥前平戸に歸着

した。それより筑後善導寺に詣で次で、石見温泉津薬師堂を拜し、同十三年の暮には近畿に歸り、山城山崎の大倉寺、橋本西遊寺等に留錫、同十六年六十歳の頃京都に入り三條大橋の東畔なる伏見治郎兵衛の歸仰をうけ、その家の後方なる敷地を拓いて草庵を建てた。

これが現今の檀王法林寺である。かくて上人の教化また忽ちにして京洛の外に普く、松平隠岐守、同嫡子越中守、所司代板倉周防守等の貴紳を初め、道俗庶民その風を望んで來集した。洛北氷室に、東山菊溪に庵を結んで心に任せて往來し、元和八年七十一歳の夏には南都の佛閣を巡拜したが、眉目山のほとりに憩ひその勝地なるに心を引かれて一寺を建てた。これ降魔山善光院念佛寺で、この寺には經藏を建立して淨瑠璃寺の一切經を譲りうけて納めたが、その脱卷進修は自ら書寫して補うてゐる。時偶ま「一切經南都善光院」の朱印を押された古經卷に、「袋中一枚」等の墨書されたものを見るが、上人老後の篤學には心から合掌せしめられる。

上人の晩年と終焉

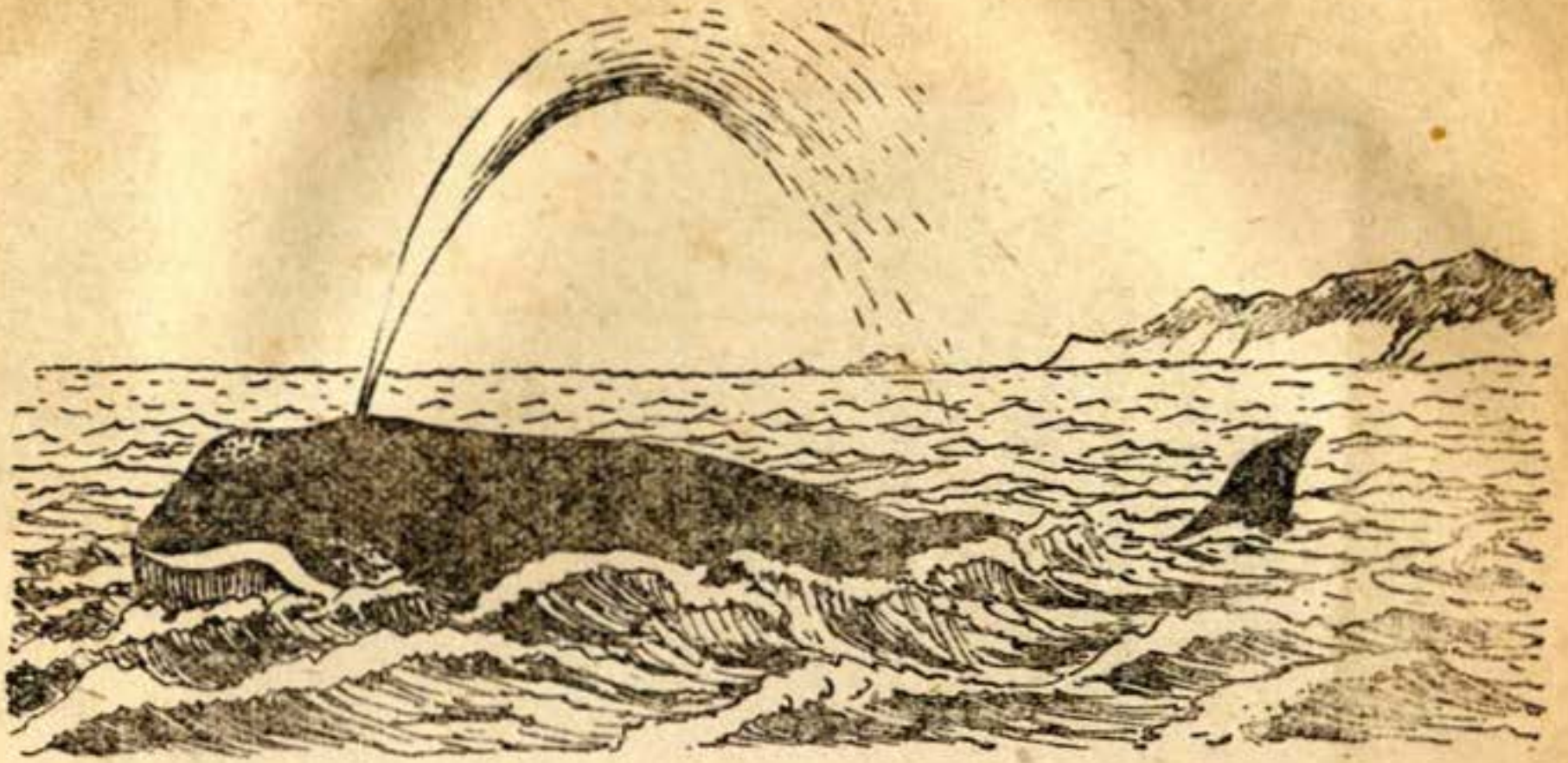
淨瑠璃寺は山城國相樂郡西尾村にある幽閑な清境である。上人は七十二歳の冬からこの地に居を占め、専ら念佛の淨業に精進した。村の住民黒田新藏なる者深く上人に歸し、草庵を建て供養を捧げた。瓶原の心光庵として今に残つてゐるが、上人は欣西の行を修するに適しいこの地に晩年を靜かに過したのである。然るに寛永十四年八十六歳の礫、郡内に重罪を犯した者があり死刑に處せられることになつた。上人深くこれを憂ひ官に赦免を請うたが容れられなかつたので、自らの教化の及ばざるを悲しみ「いつみ川雲井の空になかれてしいま行末は風にまかせて」の一首を残して、十三年間住みなれた心光庵を竊かに逃れ出で、木津川の急流に身を任せて、この地を去つた。群生の罪を自らの罪として憂ふる老教家の道念こそ、勿體なくも尊いものがある。木津川を下つた上人はその西岸なる丘陵の巔喜郡飯岡村に着き、その背精舎のありし

といふ勝地に、居民奥林三良兵衛と計つて一字を興した。これ今の飯岡西方寺にして飯岡の三ツ峯は今に残る薬師、釋迦、彌陀の石佛三體を建立し、道俗を教化した。寛永十五年の冬より微疾あり、翌十六年正月二十一日、釋尊入涅槃の嚴儀に習ひ、頭北面西して稱念念佛の裡に終焉した。春秋八十八歳、示寂の地京都綴喜郡飯岡西方寺には、等身大の上人木像一體がある。

遺 芳

大徳袋中上人遷化して正に三百年、上人教化の芳蹟は北は奥州より南は琉球の果てに至るまで、輝かしい行績として存してゐる。著書數十部、開創の寺院十數ヶ寺、八十八年の不倦精進の生涯は讃仰の辭もない。大乘佛教の世界躍進が叫ばれる時、われ等は志勇なる先徳袋中上人の模範に伍すべきではないか。

(寫眞は琉球國王自畫賛袋中上人肖像・京都檀王林寺藏)



童話 文覺上人と土龍の話

奥 榮 一

野 水 昌 子 畫

むかし文覺上人と云ふ大層えらい坊さんが
ありました。上人はもとは京都の御所に勤め
てゐた大變強い侍でしたが、或時何か心に
感じるものがあつて弓矢を捨て、坊さんにな
つたのです。さうして、此世で嘆き苦しんで
ゐる人達を救はうと云ふ願を立てて、その爲
めに日本で一番大きな熊野の那智の瀧へ行つ
て行をすることになりました。そこで上人は
京を立ててはるばると熊野浦までやつて來ま
した。すると、その熊野浦で、鯨が鯨に追ひ
かけられて、大層苦しんでゐるのに出合ひま
した。

上人は慈悲深が人でしたので、大きな鯨が
小さな鯨に苦しめられてゐるのが可哀想にな

りまして、鯨を追放つて、鯨を助けてやりま
した。
さうしますと、鯨は大變悦びまして
「お上人様、どうも有難うございました。こ
のお恩は決して忘れません、きつとその中御
恩返しを致します」

と、云つて悦び勇んで沖の方へ泳いで行き
ました。

上人はそれから那智の山に近い里の方へ歩
いて居りますと、今度は路の傍で子供達が一
匹の土龍を捉へてさんざんいぢめてゐるのに
出合ひました。

「これ、これ子供達、そんな無慈悲なことを
しないで、勘辨して逃がしてやりなさい」

上人は子供達にから云ひました。子供達は上人が大きな強さうな坊さんでありますから、こんな風に優しい言葉で云はれると、却つて氣味が悪くなつて、そのまま土龍をうつちやらかして散り散りに逃げて行きました。

土龍は危い命を助けられたので、大層喜んで、

「お上人様、どうも有難うございました。この恩は決して忘れません。きつと、その中御恩返しを致します」

さう云ふと嬉しさうに雀躍りして、

田圃の土の中にもぐり込んでしまひました。

そこで、上人はまた足を早めて、

だん／＼那智の山に近い麓の方へや

つて來ました。すると、今度はその山

路の最中に一人の小さな子供が佇んで、

わんわんと泣いてゐるのに出合ひました。

「これ、これ、坊や、お前そんな處でどうし

たんだい」



上人はさう云つて子供に訊ねました。

「お友達と山へ遊びに來ただけど、お友達にはぐれてしまつたんです」

子供は泣きながらから答へました。

「よし、よし、それならも泣くことはない、

私がお前のおうちへ連れて行つて上げやう」

上人はから云つて子供を連れて、村里の方

へやつて來て、その子供をお父さんやお母さんのおうちへ連れて行つて上げました。

子供の親たちは大層喜んで、さん／＼お禮を云つた後で、

「時に、和尚さん、あなた様はこれからどちへお越しでございます」

と、文覺上人に訊ねました。

で上人は、

「私か、私はこれから那智のお山へ登つて、日本一のお龍で行をしようと思ふのだ」

と、答へました、

すると、子供のお父さんも、お母さんも大變驚いて、

「まあ、それは大變でございます。でも御信心のことですから何とも申上げられませんが、この山には天狗が居ります

ので随分お氣をつけなさいまし、これはほん

の御口汚しですが手製の餡が有りますので、

お禮の印までにお持ち下さいまし」

と、云つて、板のやうに固い餡を竹の皮に包んでお上人に呉れました。

文覺上人は子供の親達から貰つた餡の包を法衣の懷に入れると、峻しい那智山の山路を登つて瀧の下までやつて來ました。

日本一と云はれる那智の瀧は高さ五十丈（百五十米）、幅が十八丈（五十五米）あまりもあつて、天までもとくかと思はれるやうな高い處から、まるで大河を切つて落したやうな恐しい勢で、轟々と水煙を立てながら瀧の水が流れ落ちてゐます。

上人は暫くの間我を忘れたやうになつて、そこに立つたまゝ見とれてゐました。すると、突然何處からともなく一陣の風がすつと吹いて來たかと思ふと、上人の立つてゐる傍の杉の大木の上の方で、大きな羽撃の音が聞えしました。

上人は何事であらうと驚いて、音のした方を見上げました。すると杉の大木の中程に、眞赤な顔をした鼻の高い天狗が今にも飛びかかりさうに眼々と眼を輝して上人を睨んで

ゐるのでした。

流石の上人もそれを見ると、思はずぶるぶると身を震はせました。以前お侍であつた頃上人なら刀も差してゐますし、弓矢も持つてゐますが、今は坊さんですからそんなものを持つてゐやう筈がありません。いくら上人が強くつても、素手では身の丈一丈（三米）もある天狗に飛びかゝられては、どうにも仕様のない事は云ふまでもありません。

「あゝ、困つた事になつた、折角こゝまで來たのに天狗に引裂かれやうとは、何と云ふ情ない事だ」

上人は心の中であらう思ひましたが、ふと、先刻子供の親達から貰つた餡の包のことを思ひ出して、それを懷から取り出すと、

「天狗さん、私はこの通りの乞食坊主だから私などを引裂いても何んにもなるまい。それよりもこゝに甘味しい餡の包があるからこれを上げませう」

と、云つて、その包を天狗の方へ抛り投げました。

天狗は杉の木の上でその包をうけとつて、中から板のやうに固い餡を取り出して、大きな口をあけてそれをべろ／＼と舐め始めました。初めは六ヶ敷い顔をして居りましたが舐めてゐる中にだん／＼美味しくなつたと見えて、大變氣嫌のいゝ顔になつて、口をもぐもぐさせてゐました。やがて、

「あつはつはつ……」

と、とてつもない大きな聲で笑ひ出しました。さうして、また羽撃の音をさせたかと思ふと、どこともなく山の向ふの方へ飛んで行きました。

そこで上人はいよ／＼今度は瀧壺へ下りて行をする事になりましたが、さて瀧壺に下りようとしますると、瀧壺はまるで大きな噴水のやうに四邊一面に水が溢れてどうしても近づく事が出來ません。上人はまた途方にくれてしまひました。

と、その時、木の繁みの中から上人が途中で助けてやつた土龍がちよ／＼と這ひ出して來ました。

「お上人様、暫くお待ち下さいまし、私が御恩返しに一働き致しますから」

土龍は上人にかう云うと、そのまゝ大急ぎでまた木の繁みの中へ入つて行きました。

上人は土龍に云はれた通り木の根に腰を下して暫く待つてゐました。

土龍はその間に、近郷近在にゐる何千何萬と云ふ程澤山の自分達の仲間の土龍を呼び集めて、龍壺から入軒ばかりもある熊野浦へ長い隧道を作り出した。さうしますと、これを海の上で見てゐた上人に助けて貰つた鯨は、早く隧道の水を吸ひ取つて仕舞はないと、水が一ぱいになつては中で齧いてゐる土龍が溺れ死んで仕舞ふので、仕事をすること出来まい。と、かう思ひまして、四邊近海の海で泳いでゐた何百何千と云ふ程澤山の鯨の仲間を招集して、隧道から流れ出して来る水を皆んなでかはるがはる腹一ぱい呑み込んで、沖の方へ行つてはそ

れを頭の頂から噴き上げました。

こんな風にして、澤山の土龍と鯨と一緒になつて一生懸命に働いたので、那智の龍壺か

つたので、上人は無事に龍壺に下りて行をする事が出来ました。

文覺上人はこんな風にして、難儀な那智の龍の荒行をすまして、大勢の人の爲めに働きましたので、後には日本國中へ知られる名高い坊さんになりました。

那智の山に近い熊野浦の勝浦と云ふ處には、今でも海の中に年中眞水の噴き出る井戸がありまして、どんな旱魃りの時でも、この中の井戸だけは眞水が絶えたことはありません。これは昔文覺上人に助けられた土龍が掘つた隧道を通つて那智の龍の水が噴き出してゐるのだと云ひ傳へられてゐます。

熊野灘を通ると、よく沖合で鯨が頭から水を噴いてゐるのを見かけます。これは若しかすると、土龍の隧道から流れて来た那智の龍の水を吸ひ込んだ鯨が、その水を今だに噴き上げてゐるのかも知れません。那智山の龍の村では、今でも石の様に固い名物の天狗飴を賣つてゐるといふことです。



雙 仰 運 動 ニ ム ニ

一段の飛躍を目指して

理事會を開く

本年度の方針確立す

本會も順調に發展して既に第四年を迎へたが、擴張策を協議して更に一段の飛躍に資せん爲に



去る二月二十五日午後二時より本部事務所に於て理事會を開催した。大村桂題、友松圓諦、安井辨義、大谷玄旭、栗本俊道、佐藤良智の各理事並に本部より中村辨康常務理事、佐藤賢順主事、赤尾光雄氏を始め本部員一同參集したが、先づ昭和十二年度の決算報告を聴き、會の

運行策を協議し、更に「淨土」の編輯並に本年度の事業等につき忌憚なき意見を交換した。本年度の事業としては

- 一、法然上人劇の上演
- 二、會員獲得大運動
- 三、一ヶ年間新聞廣告すること
- 四、巡回講演
- 五、傷病兵慰問

等に全力を注ぐことを決定し「淨土」の編輯に就ては大衆性を保つ事、並に毎號變化に富ましめることを堅持し、面白い中に宗教味を盛るやう精進すること等を申合せた。財政の基礎も固まり「淨土」も愈々堅實の歩みを續けてゐる今日、更に一段の飛躍を試みんとし、てゐる本部のこの動きは教界注目目的であるが、全會員も是非とも本會擴張の爲に一層の努力を續けられん事を切望する。

慰問『淨土』

益々盛況

宗務所臨時事務部で募集中の傷病將士の慰問用「淨土」は其後益々盛況で、國家の爲に身體を損傷した勇士を心から慰めよと、全國から大口の申込からどしどし宗務所に寄せられる。如何にこの企てが全國に熱狂的に迎へられてゐるかは想像以上である。本會でもこの熱狂にこたへて編輯も充實し愈々四月號から各地に配本する事に決定した。

會員の喜

小樽市・平井 篤慈

存する。小樽市稻荷町嚴密清光明道居士一朱に交はれば赤くなる。爾仰會のお蔭で我が淨友會が結成され、毎月有難き法蘭の理法を聴かせていたゞく様になりました。路傍の一木一石にも親しみを持った様になりました。これまで踏んだり蹴飛ばして歩いたものを拾つたりとつとわきに寄せる等「木の葉の飛ぶのを見てをたかしく見える」とか、私も此頃森羅萬象總て愉快に感ぜられてなりませ

北海道で福壽草の事を萬作と云ひます。日常りのよい丘では福壽草を破つて此の萬作が黃色黄光の笑顔を見せます。又、ヒロロと云ふの（前の顔）も、やがて畑一面に芽生えす。「北海道の春は睡から」と云ひます。何の道場でも一個千金を新念しつゝ、新道場に、新らしい洋天で威勢よく準備にかゝつておます。野も、山も、家にも、酒にも、春盛りだ。春だ!!! 山川草木、人畜並る春だ!!! これまで監督窓からアゴで指導した店員に自分から率先して型で見本を示す様になつて以來、お互に自分の責任園内を任せられ、とても熱心にお氣遣な程よく動く様になりました。登校時間に骨の折れた十になる子供がお佛様に喜んでお祈りする様になりました。お佛様にお願い、お驚人等入れる所を設け様と相談してゐましたのに、設はずして勝つ實に皇軍の概があります。魚肉の妬ひな妻が、とても好む様になりました。それは私がお看なれば三度々々でも云ふ程なきながらです。そして私が美味さうに、もう一切も残つ

信 仰 相 談

中村辨康師擔當...

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

呼吸法と臍下丹田

(問)

佛教の呼吸法とも云ふべき「數息觀」や、支那の仙術の「鍊丹」など云ふは、健康的にも大變よいと云ふ話ですが、事實長壽者の多いところから見て、實際的効果があると信ぜられます。それで私達念佛信者も念佛する時、自然下腹に力が入るから、信仰には直接した問題ではありませんけれども、出来るならさう云ふ事も心得て居て念佛唱名に應用し自分の健康を増進したいと存じますので御面倒でもそれに就て御教示を願ひます。

(尾張 KA生)

(答)

實際的な問題として面白い御尋ねです。また信仰は決して健康の問題を無視して居るものではありませんゆゑ、一應申し上げて見ませう。但し私は「數息觀」や「鍊丹術」をした事はありませんから、唯だ自分が念佛した経験の範圍だけで、御参考に供します。

摩訶止觀と云ふ本に「正しく治病を用ふとは、丹田は是れ氣海にして能く萬病を銷吞す。若し心を丹田に止めば則ち氣息調和す。故に能く疾を愈す。即ち此の意なり」とあり、また翻譯名義集には數息觀に就て

「當に便宜に隨ひ以て出入を數へよ。若し心輕浮せば心を丹田に繋けて當に入息を數ふべし。若し心昏沈せば心を鼻端に繋けて當に出息を數ふべし。此れ皆な出入共に數ふるを許さず」とあります。このやうに「丹田に心を止めて呼吸すること」が治病法でもあり治心法でもあるとした譯で、數息觀と云ふ坐禪法は、元來治心治病の爲めの調息法だつたのでせう。一體「丹田」と云ふのは鍊丹術で云ふ神丹を鍊る「田」と云ふ意味であり「氣海」は呼吸の元と云ふ意味であります。臍下一寸、一寸半、二寸、二寸四分、又は二寸半など諸説まちまちですが、恐らく人に依るか又は尺度法の標準が違つて居る爲かでかゝる相違があるのだと察せられます。白隱禪師の「遠羅天鑑」には「丹田なる者一身三處

吾が謂ゆる丹田は下丹田なり。氣海丹田各々臍下に居す。一實にして二名あるが如し。丹田は臍下二寸、氣海は寸半」と云つて居りますから、我國の尺度にして大體一寸半から二寸の處へを云つたのでせう。下腹へグツと力を入れて見て其力の集注する處がそれです。私のハキツカリ曲尺で臍下二寸の處です。上りもしなければ下りもしません、何時でも其處です。然し初めから其處と決まつて居る譯ではありませんでし。初めは力の集まる場面が廣くて臍のあたり一面だつたので隨つてすぐ力は抜けましたものですが、何かの拍子でフツと其處に力が集つて「ハハア是が丹田だな」と自得したのでした。實を云ふと其前までは御腹へ力を入れると云つても入れ方が判らなかつたので無茶苦茶

信 仰 相 談

だつたのですが、その時以來力の入れどころが判つて別に注意しなくても力が入るやうになり、お腹が段々ふくれて來たのでした。之も御念佛のおかげで別段呼吸法を練習したのではありません。昔しはやせつぼちで年中風邪を引いてよく扁桃腺炎をやり、胃腸も弱かつたものですが、それ以來何時しか年に一回位より外に風邪を引かなくなり胃散の必要もなくなりました。これが原因か何うかは判りませんが、敢てその効能を並べようとは思ひませんが、一分の健康を助けたものとは思つて居ます。私としてはさうした身體の問題よりも、心が人並以上で散亂していけなかつたのか、いくらか人並には集中し得るやうになつたことを喜んで居るのです。つまり比較的念佛中にも心が散らなくなつた

のは確かに此の丹田に力が入るやうになつたからだと思つて居ります。健康の上にも多少の効果はあるのでせうけれども、むしろ信仰に如來様への「南無」の心が持続されることの方を嬉しく思つて居ります。また支那仙術の「鍊丹法」のことはよく存じません。一冊何とか云ふ人の鍊丹術と云ふ本を所持して居りますが、小面倒な事が並べてあつて下らないと思つたものですから、何處か本箱の隅につつこんでしまひました。要するに丹田に氣を沈めて長生の神丹を鍊ると云ふことで、呼吸法を精細にクドクド云つたものだつたと記憶して居ます。それよりも遠羅天釜に引いてある文句に「生を養ふの要は先づ形を鍊るに若かず。形を鍊るの妙は神を凝すに在り。神凝れば則ち氣聚る。氣聚れば則ち

丹成る。丹成れば則ち形固る。形固れば則ち神全し」と

鍊丹法を云つたものです。云ふのがあります。即ち簡単に

念佛のいろく

問

私の地方では和讃をやることも御詠歌をやることも皆な念佛と云つて居ります。廣い意味からさう云ひ習されて居るのでせうと思ひますが、念佛の起原や種類などを心得の爲めに知つて置きたいと存じますから御教示願ひます。

答

(遠州 大念佛生)
念佛を最も廣い意味で云つたら、各宗各派の別はありまして、皆な均しく念佛ならざるものないといふへないこともありませぬし、また佛を「覺醒者」と云ふ意味に解釋すれば、人間が向上を要求してなす一切の行爲は皆な念佛だと云へます。然しそんなにま

で風呂敷を廣げなくても、御尋ねの詠歌和讃などは讃佛の意味で昔しから「念佛」と云つて居たのは事實で、鎌倉時代からはグツと念佛が我國の民間を風靡して居たのではないかと想像されます。

念佛の種類は随分多く原始的には雜阿含經の六念の中の念佛即ち今でもセイロン島あたりで行はれて居る佛の十號を稱へる念佛ですが、之が念佛の起因かも知れませぬ。何しろ佛弟子は旅行中など常に佛を念じて居たらしいですからそれが段々佛教の理の發達に依て、稱名の念佛、觀像の念佛、觀想の念佛、實相の念佛と云ふやうな

信 仰 相 談

四大別される程になつて、具體的には攝心念佛、數息念佛、參究念佛、看話念佛、融通念佛、秘密念佛などに展開し、稱名念佛も、眞讀念佛、誦略念佛、引聲念佛、甲念佛、歌念佛、耶念佛（此中に空也念佛、六齋念佛、泡齋念佛、葛西念佛、壬生念佛、嵯峨大念佛、上總念佛、ちやんがら念佛、遠州大念佛等）など一種の風俗風習にまで發展したのです。眞讀念佛にしても前號の本欄にも問題が出ました「三重の念佛」とか、此外にも天台宗眞盛派の念佛、融通念佛宗の念佛、禪宗派の念佛、眞言流の念佛などがあり、淨土教の中にも淨土宗、同西山派眞宗各派、時宗と云ふやうに多少意味の異つたものが分化した位で、随分澤山な念佛がある譯です。經典の中から拾つても前述の雜阿含經は勿論増一

阿含經、廣演品、長阿含經、那先比丘經、般舟三昧經、華嚴經、文殊般若經、觀佛三昧經、坐禪三昧經、放光般若經、佛藏經、菩薩念佛三昧經乃至は大寶積經、大阿彌陀經、無量壽經、阿彌陀經、觀無量壽經等、大乘經典の大部分が多少の差はあれ念佛とか念佛三昧とか云ふことに觸れて居り、舊華嚴經入法界品の如きは二十一種の念佛三昧法を示し、懷感禪師の群疑論には有相無相の二種、惠心僧都の往生要集には定散有相無相の四種、傳燈禪師の楞嚴經圓通疏には三種の念佛、其他支那の禪宗の人や日本でも天台宗の人などに觀の念佛に就て色々な書物を書いて居りまして念佛に關する書籍は汗牛充棟も及ばないと云ふ有様ですから、それを一一拾ひ出したら大變なことになる

ませう。然し私達が今之を研究すると云ふことになる中々容易のことではなく、或は一生涯かかつて完了しないです。それよりも古今の宗教的天才であつた法然上人が十八歳から四十三歳まで二十五年間大に没頭して遂に結論として得られた選擇本願の念佛即ち

一枚起請文に云ひあらはされた念佛に信賴することが、一番賢明だと存じます。例へば電氣に關する色々の研究を遂げから電燈を用ゆるよりも、三十錢か五十錢出して瓦斯入電球を買つて来て付けた方が一番手取早いと同じことです。

原稿募集

信仰實話・信仰體驗談原稿募集

○あなた御自身の信仰體驗、または直接に見聞された信仰篤き人の話を、讀物として興味深く讀めるやうにお書き下さい。

○四百字詰原稿用紙十枚以内のこと、封筒に應募原稿と明記し原稿にも住所氏名を明記して下さい（紙上匿名は可）
○毎月二十五日で切り、當選の分は翌々月號に發表します。

○掲載の分には薄謝を呈します。

○送先——東京市芝區芝公園明照會館内淨土編輯部

編輯後記

◇暑いも寒いも彼岸まで——とは云ふものゝ、今年は馬鹿に早く暖かになつたと思つたら、また一轉して冷雨に見舞はれると云ふ、唯ならぬ氣候の激變振り、皆様にお風邪を召さぬようと云はうと思つてゐる中に編輯子が再度の風邪に見舞はれて、くしんくしんとやり乍ら、やつと校正を了へた始末です。

◇でも、四月の聲を聞けば、花も咲き鳥も鳴から、本物の陽春です。四月は佛誕の月、花祭りの月です。本誌が皆様の手に渡る頃には慈光燦として輝く陽光の下に輝かれることでせう。そこで、本誌は特に「花祭り特輯」としてムラガンダ寺院の大壁畫を完成された野生司香雪畫伯、及びボース・ラス・ビーハリ氏の御寄稿を御願申し本誌を飾りました。特

に野生司畫伯は御自身ルンビニ園を踏まれた體驗を語られ、掲載の寫眞も畫伯自ら撮したもので、仲伸得がたい逸品ばかりです。中にも阿育王の勅額、拓本は日本でもお持ちの方は殆んど無いであらうと云はれてゐる品です。本誌の獨特記事として誇り得ると共に畫伯の御好意に對して深謝する次第であります。

◇なほ、本誌よりは全國の淨土宗寺院並びに篤信者の特志による御寄附で全國の陸海衛戍病院に多部數御寄贈申し、名譽の戦傷兵をお慰めすることゝなりましたので、それに因み新管長郁芳隨員大僧正親下の巻頭の辭を乞ふて掲載いたしました。

◇本誌がこれを手になされた傷病兵の方々に幾分のお慰めともなりますれば、本會はもとより、御寄贈の方々の大いなる光榮であります。我々も本誌の向上の

ために更に一層の努力を致すつもりですが、讀者よりもしく御批評、御注文、御感想を御寄せ下さるよう御願申上します。

◇本月は釋尊御降誕の月であると共に宗祖法然上人御誕生の月でもあり、且つは本誌によつて淨土も滿三年を了へ、愈々第四年に進む一つの飛躍期にも當つてをりこの積る因縁に我々は實に感慨にうたれてをります。

◇記念すべき月を迎へて過來し方をふりかへつてみると、發展を續けた滿三年の幾多の思出が去來します。

◇この因縁深き月に本誌の大増刷を見、本會の使命の益々重きを感じてをります。本誌の内容の充實、向上は更に拍車をかけなければなりません。來月號は更に面目を一新し、來々月は更に躍進すべし——と懸命の努力を續けています。感謝と誠意とをもつて。

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年三月三十日印刷納本
昭和三年四月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が學つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年三月廿日印刷納本
昭和十三年四月一日發行

淨土 第四卷 第四號

定價 金十錢（送料一錢）
滿鮮臺灣等
外地定價 金十一錢